

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア



世界を解く  
**【信じる】**

《対談》  
 日本のリーダーが語る  
 世界競争力のある人材とは？  
 電気通信大学長

**梶谷 誠氏**  
 一橋大学長 杉山武彦

進化する大学

アジア研究教育拠点事業  
 「東アジアにおける法の継受と創造」  
 東アジア共通法の基盤形成に向けて  
 集中講義「日本を展示する」

第1回 一橋大学・東京工業大学  
 合同移動講座

《対談》

一橋の女性たち

同志社大学大学院ビジネス研究科教授

**浜 矩子氏**  
 商学研究科准教授 山下裕子

《連載企画》

個性は主張する

隠岐の民宿「但馬屋」勤務

**宮崎雅也氏**

《特集》

地球の風 地域の風

株式会社北島 代表取締役社長

**香月道生氏**

《連載企画》

Captains

**上田貞次郎**

# CONTENTS

## 巻頭特集 1 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

●対談

電気通信大学長／梶谷 誠氏 VS 杉山武彦学長

**初めの一步は、学ぶ力より楽しむ力  
Unique & Exciting Campusで「楽力」を発揮してほしい**

## 進化する大学

### 特集 8 アジア研究教育拠点事業

「東アジアにおける法の継受と創造——東アジア共通法の基盤形成に向けて」

### 12 集中講義「日本を展示する」

### 14 第1回 一橋大学・東京工業大学合同移動講座

### 16 研究室訪問 chat in the den

### 連載企画 20 世界を解く——第17回テーマ

22 ●企業統治

24 ●民法

26 ●開発経済学

28 ●文学

# 「信じる」



### 連載企画 30 Captains

## 上田貞次郎

「実証研究」を追究し、  
国家発展のための政策提言に奔走する

### 連載企画 36 対談 一橋の女性たち

同志社大学大学院ビジネス研究科教授／浜 矩子氏  
商学研究科准教授／山下裕子

### 連載企画 39 個性は主張する One and Only One

隠岐の民宿「但馬屋」勤務／宮崎雅也氏

### Book Review

45 「ねずの木の話」

46 ベルンハルト・シュリンク『朗読者』

### Love of Culture

47 「乗馬」

### 特集 48 地球の風 地域の風

株式会社北島 代表取締役社長／香月道生氏

### Campus Information

54 ●一橋大学基金ご寄付者のご芳名

56 ●【Admission Information】MBA Program in International Business Strategy

57 ●第5回 一橋大学関西アカデミア開催のお知らせ



2



8



14



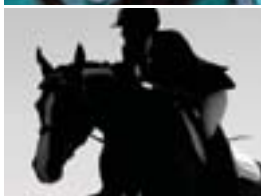
30



36



39



47



48



日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

2018年に創立100周年を迎える電気通信大学。「UECビジョン2018」では、「総合コミュニケーション科学」を掲げて、さまざまなビジョンを打ち出しています。コミュニケーションを基軸とする新たな文明の模索と創造が必須だと考えているからです。今回の対談の会場はこの電気通信大学。杉山学長は、UECコミュニケーションミュージアムを見学して同大の歴史を目の当たりにし、折から始まった学園祭準備を見て大学の雰囲気を感じながら、電気通信大学の梶谷学長との対談に臨みました。



初めの一步は、学ぶ力より楽しむ力  
Unique & Exciting Campusで「楽力」を発揮してほしい

電気通信大学長

梶谷 誠氏

一橋大学長

杉山武彦

電気通信大学では、「国際性と倫理性を備え、実践力に富んだ人材」の育成を目指しています。

一橋大学の「キャプテンズ・オブ・インダストリー」も国際性と実践性を意識しています。

しかし、工学系と社会科学系の違いからか、その「実践」が意味するものが微妙に違うようです。

杉山学長は、そこに着目して電気通信大学の梶谷学長にアプローチしました。

## 電気・機械・情報が融合した 典型例がロボット

**杉山** 本日は、電気通信大学におじゃましました。UECコミュニケーションミュージアムをご案内いただき、無線通信関係のさまざまな機器類や膨大な真空管のコレクションなど、電気通信大学の歴史の厚みと底力を目の当たりにした思いです。

HQでは、各界のリーダーにさまざまなお話を伺っています。工学系の大学ということで、一橋大学とはまた違った側面が多々あると思います。話の導入として、まず、梶谷先生の学問的な歩みからお聞きしたいと思います。

**梶谷** 私の専門分野は、おおざっぱに言うと機械工学。30年ぐらい前に日本で生まれた機械工学と電子工学、情報工学が融合した概念であるメカトロニクスです。これは和製英語ですが、今では世界中で通用します。昔ならば自動車といえば機械工学だけで製造できました。しかし、現在では自動車には何十というコンピュータが搭載され、さまざまな制御を行っています。それは、自動車ばかりではありません。ほかの機械分野でも同様なのです。

**杉山** 確かにあらゆる分野でコンピュータが、活用されるようになってきました。

**梶谷** トイレットペーパー騒ぎがあった第2次オイルショックのときに日本人が身をもって知ったのは、日本には資源が



## 梶谷 誠（かじたに・まこと）

1940年生まれ。1964年電気通信大学電気通信学部通信機械工学科卒業、1971年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了（工学博士）。1971年電気通信大学短期大学部講師、1989年電気通信大学電気通信学部教授、1999年電気通信大学共同研究センター長、2000年5月～2004年3月電気通信大学長。2004年4月国立大学法人信州大学監事、コラボ産学官理事長、電気通信大学名誉教授。2008年4月国立大学法人電気通信大学長就任、現在に至る。専門分野は機械工学。

## 杉山武彦（すぎやま・たけひこ）

1944年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業後、1970年同大学大学院商学研究科修士課程修了、1974年一橋大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学。1974年成城大学経済学部専任講師、1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授、商学部長、副学長を歴任し、2004年12月より現職。研究分野は交通経済。





ないということです。そこで、軽薄短小という言葉が流行しました。ちょうどそのころ、マイコン（マイクロコンピュータ）が誕生しました。ちなみに、これはアメリカで開発されたものですが、その開発には日本人が貢献しています。ともかく、コンピュータで制御することで、冷蔵庫やテレビの省エネ化が進みました。こうして、1980年代の日本経済は、外国から視察団がくるほどの驚異的な復活につながったのです。

私が電通大に入学したのは昭和35年でしたが、その年に通信機械工学科ができ、その前年の34年には電子工学科ができていました。

**杉山** なぜ、通信機械工学科ができたのでしょうか。

**梶谷** 電話交換機のスイッチングのメカニズムの部品が疲労で破損する事故がしばしば起こりました。小さな部品を使う電機分野では、機械の部分もちゃんとしていないと機能しません。そこを意識してつくられたのだと思います。通信機械工学科では、機械関係のカリキュラムは一般の機械工学科の半分ぐらいで、残りの半分は電子工学関係の教科を学びまし



た。実質的にはメカトロニクスを学んだわけですね。電気、電子、機械の融合です。ロボットはその典型ですね。メカがわかりコンピュータに強くないと、ロボットは動かせません。

大学院時代には、企業に出かけて研究を進め、学位論文を仕上げました。私はその当時から、産学連携で研究を進めていたのです。学術的というより技術寄りの研究をしてきましたので、製品化したものもあります。例えば、角度の標準になるロータリー

コーダーの日本の国家標準は、当時我々が考えたアイデアでできています。

なお、私が教員になったときには、電子工学科に人気がありましたが、今では智能機械工学科など機械関係に人気が集まっています。

## 「楽力」が開く 創造的なものづくりの力

**杉山** 今ではロボットなどのメカトロに人気があるとのことですが、大学全体としてはどんな人材を育成しようと考えているのでしょうか。

**梶谷** 「U E Cビジョン2018——100周年に向けた挑戦」というビジョンを昨年つくりました。

経営戦略としては、（1）知のボーダレス化（2）連携と協働（3）開放性と透明性、を挙げています。教育方針は、「国際標準を満たす基礎学力の上に、国際性と倫理性を備え、実践力に富んだ人材を育てます」と謳いました。産業界の現場で重宝がられる職人的な人材の育成です。「君たちは体で勝負しろ！徹底的に体験しろ！」と学生たちにはハッパをかけています。実践力に富んだ人材を輩出するという伝統は、これからも守っていきます。

**杉山** 一橋大学の、「キャプテンズ・オブ・インダストリー」も実践性と国際性を重視していますが、その「実践」のニュアンスが違うようですね。

**梶谷** 我々の大学は工学系ですから、実際にものづくりができればなりません。私の研究室ではものをつくる時こんな問答をします。

「できるか？」

「できるはずです」

「できるはずではダメだ。できあがるまでやるのが技術者だ」  
「……」

「いつもできるのか？もう一回やってみろ。何度やってもできるのか？」

技術者はやり遂げることが重要なのです。

**杉山** ものづくりの力をつけさせるための教育に力を入れているわけですね。

**梶谷** 何よりも大切なのは、本人がそのことで喜びを感じられるかどうかです。面白くて仕方ない。やり遂げたい——そんな気持ちを知り、達成感を味わうと、またやりたくなる







ものです。そんな学生の様子を見ながら、「もっと早くできないか？ 世界一のものができたか？」とハッパをかけます。最初に楽しみを見出すことが重要なのです。私は、それを「楽力」と名づけました。ちなみに、2003年度には「『楽力』によって拓く創造的ものづくり教育」で、文部科学省の特色G P (特色ある大学教育支援プログラム) を獲得しました。

## ものづくりの場「工房」で、 「楽力」と「実践力」を磨く

**杉山** 「楽力」とは、楽しいネーミングですね。ところで、電気通信大学の略称のUECは、「Unique & Exciting Campus」



の略だと今日初めて知りました。まさにぴったりのネーミングですね。

**梶谷** これは、ビジョンづくりの際に併せて改正したものです。「例えば、こんなネーミングはどうだ」といって、いろいろアイデアを出してもらったのですが、最終的に「これがいい」と、私が例示した案に決まったのです。

話を戻しますと、最初は学ぶ力より、楽しむ力です。子どものころには、みんなそんな力を身につけていました。昔の子どもは、自分たちで遊びを見つけたり、道具をつくったりして、自然に面白さを見つけ、楽しむことを知りました。今は、そういう経験をせずに大学に入学してきます。だから困ってしまうのです。

また、学生にアンケートを取ってわかったことがあります。入学時には、ロボットや飛行機、自動車などに興味を持っています。しかし、そういう研究ができるのは、3年生以降で



梶谷学長自ら学内に設置されたUECコミュニケーションミュージアムをご案内下さいました。日本における通信技術の歴史や技術発展、通信機器などが展示されています。



す。そこで、3年になる前にやる気を無くしてしまう。これでは意味がありませんから、1年次からやらせようと「何でもやる塾」を提案しました。例えば、「ロボメカ工房」をつくりました。簡単な工作機械を置いて、1年から3年までの誰でもが、作りたいものを作れるようにしたのです。最初は、学外のロボットコンテストに出たいという学生が集まって始まりました。今では、「電子工学工房」「ヒューマンメディア工房」もできています。こうした工房は、実践力を高めるためのいい場になっています。コンテストに出ると、学生の言動にも迫力が出てきますね。

**杉山** こうした場づくりが、楽しむ力の「楽力」向上に役立っているわけですね。



## 基礎的な力を磨く キャリア教育A・B・C

**杉山** 「楽力」を発揮するには基礎的な力が必要になります。今は、基礎学力を十分持たずに入学してくる学生もいますから、そのミニマムを確保する教育は必要になりませんか。

**梶谷** キャリア教育A・B・Cという講座をつくっています。かつては企業人を招いて講演をしていただいただけだったのですが、もっと実践的にしようと大幅に改善しました。中小企業経営者の特任教授をリーダーにして、約20名のチームティーチングアシスタントがそれぞれ一組10数名の学生グループの

ディスカッションのアドバイスなど学生のケアをします。このアドバイザーはシニア年代の公募です。3年生のキャリア教育Cでは、5～6人のグループに、



「この大学をもっとよくするための課題を見つけ、解決策を考えよ」といった課題を与えます。学生は、学内を調べてレポートにまとめます。例えば、緊急連絡用のトランシーバーを学内各所に設置するという提案がありました。

実際に実験して、中継点を基地にすれば学内どこでも繋がることを実証してくれました。こうした経験を通じて、学生はプレゼンテーションが上手になり、学外コンテストでもいい成績を取っています。技術だけ教えていてもダメなのです。

**杉山** キャリア教育の一環としてインターンシップなどは行わないのですか。

**梶谷** インターンシップもありますが、キャリア教育Aでは、希望者を10～20人募って企業見学を行います。訪問する前にはマナー教育を行い、訪問先で議論して、帰ってきてからも議論をします。これまで大学ではやらなかったような教育をやっているのです。人間教育ですね。

なお、来年度からは『電通大概論』という授業を開始します。1年生の前期に、電通大がどんな大学かを知り、誇りを持ってもらおうという狙いです。大学を知り、調布の町を知って、そのよさがわかれば、大学生活も面白くなってきます。この講座にも、チームティーチングアシスタントをつけます。

## 大学がダメになると、 地方がダメになり、日本がダメになる

**杉山** どんな学生を受け入れて、教育していきたいとお考えですか。

**梶谷** アドミッションポリシーとしては、総合コミュニケーション科学やその基盤である自然科学に興味と探究心が旺盛





な人を求めています。若手研究者が集い、伸び伸びと研究し、そこからユニークな発想が生まれてくるように、開かれた教育研究環境を整えていきます。21世紀は、高度コミュニケーション社会だと捉えています。それは、「人と人」「人と自然」「人と社会」「人と人工物」の相互作用が、社会発展の基盤になると考えているからです。

**杉山** 社会との連携にも積極的に取り組んでいるようですが……。

**梶谷** 調布青少年発明クラブや子ども発明教室といった、子どもたちを対象にした講座など、地域との連携に力を入れています。2004年には「コラボ産学官」をつくりました。朝日信用金庫の支援を受けて設立されたもので、地方大学が連携して都内での情報発信を行い、大学のシーズを企業に活用してもらうことが狙いの一つ。地域の信用金庫を核にした全国ネットワークを構築して新しい産学官連携モデルによる地域活性化を図ろうとしています。信用金庫の渉外係は地元企業を訪問してニーズのヒアリングをしていますから、大学の敷居を低くしています。なお、「コラボ産学官」には、全国の信用金庫が出資するファンドがあり、すでに20数社に投資しています。

**杉山** 複数の大学が連携する「スーパー連携大学院」構想についても教えてください。

**梶谷** 複数の地方大学と企業、官公庁、地方自治体、公的試験研究機関が連携してイノベーション博士の育成を目指すのが「スーパー連携大学院」で、2011年に開設しようと準備しています。電通大を代表校に全国14大学と多くの企業が連携して準備を進めています。経済が疲弊している地方にある大学は、閉じこもっていても能力が発揮できません。どんなに優れた能力を持っていたとしても、座して待っていたのでは殺してしまいます。しかし、連携すれば優れた能力の存在が明らかになり、相互刺激によるシナジー効果が生まれ、強い力を発揮できるようになるのです。なお、信用金庫のテリトリーは地方ですから、地方が疲弊すると困ってしまいます。中核となる金融機関を信用金庫にしている理由は、そこにあります。

大学がダメになると、地方がダメになる。地方がダメになると日本がダメになる。こうした発想で、さまざまな活動に取り組んでいます。

**杉山** 学内には、産学官連携センターがありますが、そこが中核ですか。

**梶谷** 特任教授を置いて新たな知の創出と活用を推進しようとしています。そこには、産学官連携支援部門、ベンチャー支援部門、知的財産部門があり、学内のシーズと学外ニーズ

のマッチングや教員・学生の事業化計画支援、知的財産の創出、取得、管理、活用の推進などのサポートを行っています。大学発のベンチャー企業はリスクが大きいです。コラボ産学官ファンドなどを活用して、活性化してもらいたいですね。

## 世の中の課題解決には 工学、社会学の連携が必要になる

**杉山** 工学系の大学として、社会科学系の大学との連携はお考えですか。

**梶谷** それは、すごくあります。「コラボ産学官」には総合大学も含まれていますが、それが重要なのです。社会が抱えて



いる問題は、工学だけでは解決できません。経済、法律、外交、工学などが一体となって、最適解を求める必要があるのです。工学系大学と社会科学系大学とは、もっと協力し合っていかなければなりません。例えば、最近深刻になっている環境問題などは、一緒にプロジェクトを組んでやっていくべき分野です。その意識が今まで足りなかったと思います。やはり、コミュニケーションが一つの軸になるでしょう。製品と人間も、コミュニケーションを取っています。リモコンを使いやすくするのは、コミュニケーションです。人の心とコミュニケーションできるような製品づくりが重要なのです。

**杉山** 実質的な連携ができれば、素晴らしいことができると思います。本日は、いろいろとありがとうございました。



## 目標と背景

アジア研究教育拠点事業「東アジアにおける法の継受と創造——東アジア共通法の基盤形成に向けて」。日本学術振興会の委託事業として、一橋大学大学院法学研究科は、中国人民大学法学院および釜山大学校法学専門大学院と連携して、2007年度から5年間の予定で本事業を展開している。目的は、「東アジア共通法の形成」を遠望しつつ、その課題を学術的に考察するための大前提として「東アジアにおける法の継受と創造」に関する研究と教育を行うことにある。

東アジアに位置する日本、中国、韓国の法的環境は、独自性もあるが類似性も大きい。近代以前は、日韓ともに中国の法文化影響を受けた東洋法として緩やかな共通面を有していた。そして、近代になってからは、その濃淡はあるものの西洋法を受け入れてきたのである。第二次世界大戦後には、各国の独自性が強まったが、日韓両国の経済発展や改革開放後の中国の市場経済の急発展により、再び共通面が増加している。

経済がグローバル化する一方で、EU経済圏や北米経済圏のような地域圏化が進行している。東アジアにおいても同様の動きが見え始めてきた。こうして、「東アジア共通法の形成」が意識されるようになってきたのである。

# 「東アジア共通法の形成」を視野に入れて 日中韓の研究者の学術交流がスタート

3年目の今年は一橋大学で国際シンポジウムを開催した。





研究上の目的は――

- (1) 日中韓における西洋法継受の歴史研究
- (2) 日中韓3国の法の現状分析
- (3) 東アジア共通法の基盤形成に向けての提言

――以上の研究を遂行する過程で、これらの問題を将来にわたって持続的に研究し、実践する若手研究者を数多く養成することを教育上の目的としている。

なお、共同研究の形式は、「国際セミナー」「共同研究会」「研究者派遣」のスタイルを取る。国際セミナーは、毎年1回、日本、中国、韓国で行われ、東アジア共通法の基盤形成に向けての重要な研究課題を統一テーマに掲げて開催される。すでに、第1・第3回のセミナーは一橋大学で、第2回は中国人民大学で開催されており、第4回は釜山大学校、第5回は一橋大学で開催が予定されている。

## 2007年度・2008年度の成果

初年度の2007年度から2008年度にかけての活動概略を紹介しよう。

2007年度には、11月17日～18日に、アジア法学会共催のもと一橋大学で国際セミナー「東アジア法研究の現状と将来」を開催。水林彪教授、屋敷二郎准教授をはじめ、3国から8名の研究報告が行われた。なお、本セミナーの成果は書籍として刊行された。また「共同研究会」としては、2007年8月に中国人民大学にて開かれた国際シンポジウム「グローバル化のもとの金融犯罪問題」で、村岡啓一教授ほか2名が出

席して研究報告を行った。10月に同大で開催された「中外法律体系比較国際シンポジウム」では、水林彪教授が研究報告を提出、相澤美智子専任講師が会議に参加した。さらに同月、中国人民共和国刑事訴訟法専門委員会委員の徐静村教授を招いて研究会も開催した。

2008年度には、11月22日～23日に、中国人民大学法学院で、「東アジアにおける法の継受と創造――公法を中心に」と題する国際セミナーを3大学共同で開催した。一橋大学からは山内進副学長、大芝亮法学研究科長、水林彪教授をはじめ11名が参加。中国からは中国人民大学副学長をはじめ、北京大学、清華大学、中国社会科学院の学者など28名、韓国からは9名、フランスからは5名が参加した。なお、このセミナーは中国国内でも注目され、中央テレビがニュース番組の中で会議の様態を放映し、新聞各紙も大きく取り上げた。

これらのほかにも、日常的に活発な研究者交流が行われている。

## 2009年度国際セミナー

### 「東アジアにおける市民の刑事司法参加」

2009年11月7日～8日、一橋大学国立東キャンパス・マキーキュリータワーで、「東アジアにおける市民の刑事司法参加」というテーマで3大学主催、法文化学会の共催のもと、国際セミナーを開催した。教室を埋めた参加者から活発な質問が飛ぶなど、盛会だった。

日本では、2009年から「裁判員制度」がスタートした。し



2007年に開催された国際セミナーの記録『東アジア法研究の現状と将来』（水林彪／編著 国際書院刊 定価：4,800円〔税別〕2009年11月1日発行）が出版されました。



かし、刑事裁判への市民参加は、中国ではすでに50年以上にわたって「人民陪審制」という形で行われている。また、韓国では、2008年から「国民参与裁判制度」がスタートした。そこで、刑事法部門では、刑事法への市民参加を統一主題として、次の4点を中心に研究を進めている。

(1) 中国における「人民陪審制」の歴史、現状と展望

長期間、「人民陪審制」を実施してきた中国の経験は、東アジア法においてどんな意味合いがあるか。

(2) 韓国における「国民参与裁判制度」の導入過程、現状と展望

韓国では、刑事司法への市民参加陪審制がどのように論議されて、制度設計がされたか。それは、東アジア法において、どのような意味があるか。

(3) 日本における市民参加の歴史、現状と展望

日本では、かつて陪審制が実施され、後に廃止されたが、なぜ


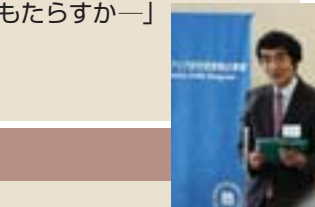
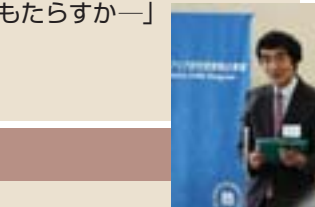
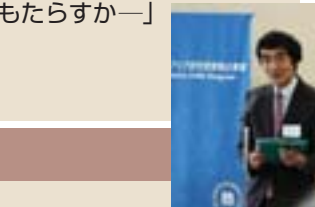
今ふたたび「裁判員制度」が導入されたのか。日本での「裁判員制度」は、東アジア法の中でどのような特色と意味があるか。

(4) 東アジアにおける刑事裁判と市民参加の特色

(1)～(3)の企画研究を通じて、東アジアにおける刑事裁判への市民参加の特色を探る。

国際セミナーの内容

これらの研究成果を受け、日本の「裁判員制度」、中国の「人民陪審制」、韓国の「国民参与裁判制度」の特色を明らかにするとともに、その歴史的、思想的、社会的背景を比較検討することを目的に開催されたのが、国際セミナー「東アジアにおける市民の刑事司法参加」である。そのプログラムは、下記のとおりである。

<p>第1セッション</p>	<p>「刑事司法参加制度の生成——法継受の側面と創造の側面——」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・村岡啓一 「裁判員制度とその誕生——法の継受と創造の観点から——」</li> <li>・関永盛 「国民参与裁判制度の概要と成立の経過」</li> <li>・陳衛東 「中国における陪審制の歴史的歩み」</li> <li>・出口雄一 「日本近現代史における刑事裁判への市民参加」</li> </ul>	
<p>第2セッション</p>	<p>「刑事司法参加の機能——市民参加が刑事司法にもたらすもの——」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・後藤昭 「刑事司法における裁判員制度の機能——裁判員は刑事裁判に何をもたらすか——」</li> <li>・安元河 「刑事司法の中での国民参与裁判制度の機能」</li> <li>・韓玉勝 「中国陪審制の運用実態」</li> </ul>	
<p>第3セッション</p>	<p>「刑事司法参加の政治哲学——市民参加の思想と憲法的地位——」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・穴戸常寿 「国民の司法参加の理念と裁判員制度——憲法学の観点から——」</li> <li>・呉姪真 「国民参与裁判制度の政治哲学」</li> <li>・韓大元 「中国陪審制の憲法的基礎」</li> </ul>	
<p>第4セッション</p>	<p>「法文化としての刑事司法参加——市民の意識と法律家の意識——」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・青木人志 「法文化としての刑事司法参加」</li> <li>・韓寅燮 「法文化の中の国民参与裁判制度」</li> <li>・朱景文 「中国陪審制の民衆的基礎」</li> </ul>	

報告者紹介

- 村岡啓一 (一橋大学大学院法学研究科教授、刑事法)
- 関永盛 (釜山大学校法学専門大学院教授、刑事法)
- 陳衛東 (中国人民大学法学院教授、刑事法)
- 出口雄一 (桐蔭横浜大学法学部准教授、日本法制史)
- 後藤昭 (一橋大学大学院法学研究科教授、刑事法)
- 安元河 (釜山大学校法学専門大学院教授、刑事法)
- 韓玉勝 (中国人民大学法学院教授、刑事法、北京市怀柔区人民检察院副檢察長)

- 穴戸常寿 (一橋大学大学院法学研究科准教授、憲法)
- 呉姪真 (釜山大学校法学専門大学院教授、基礎法)
- 韓大元 (中国人民大学法学院院長・教授、憲法)
- 青木人志 (一橋大学大学院法学研究科教授、比較法文化)
- 韓寅燮 (ソウル大学校法学専門大学院教授、刑事法)
- 朱景文 (中国人民大学法学院教授、法理学)



## 「東アジア法学院」の設立を期待したい



中国人民大学法学院院長  
韓大元 教授

一橋大学大学院法学研究科と中国人民大学法学院とは10年以上にわたる交流があります。そこに韓国の釜山大学校が加わって5年間にわたる研究を行うことは大いに意義があります。

1年目は一橋大学における国際セミナーを通じて共通認識を培いました。2年目は、中国人民大学法学院で、国際セミナーを開催しました。こうして、東アジアの法制度が西欧の影響を受けていることを認識して、その創造的発展に向けてどんな課題があるかの分析を行ってきたのです。

その意義は、(1) 共同研究を通じて学術的に共同課題を見出し各国の制度的発展に寄与する (2) 東アジア地域における一体化に向けて必要な課題を考える (3) 3国において東アジアの法制の学術的研究に関わる若手研究者の養成、などが挙げられます。

また、こうした研究を通じて法概念、法体系など東アジアの法文化が完成されていくことが期待されます。重要なのは、東アジア法制の研究機構が構築されること。これにより、体系化、システム化が図れます。将来の発展を考えると、専門的な人材、ゆくゆくは東アジア共同体を担うであろう人材の養成が重要になります。「東アジア法学院」の設立が期待されます。(談)

## 自国の経済、法制を振り返るいい機会だ



釜山大学校法学専門大学院  
文竣暎 助教授

釜山大学法学専門大学院は、3国の共同研究により、良い影響を受けています。研究教育面で言うと——韓国と中国、あるいは韓国と日本という関係での学术交流はありました。しかし、これまでこの3国が1つのテーマで研究交流することはほとんどありませんでした。このプロジェクトを通じて、3国の交流体制ができたことが重要なのです。つまり、アジアの問題を3国共通の課題として受け止めて、研究に取り組むようになったことに意味があります。すでに、3国間では、政治的、経済的、市民社会レベルでの交流は頻繁化しています。そんななかで、法学研究者が相互理解を深めていくことは、学問的に意味があることだと受け止めています。特に国際セミナーを通じて、各国の共通点を探しながら共通法までを視野に入れて論議することが、重要だと思っています。

来年は釜山大学校で国際セミナーが開催されます。東アジアで共通法が可能なのか。そこにはさまざまな論議がありますが、各国の研究者が自国の経済、法制の現状を踏まえて共通法への規範作りをどう進めていったらいいかを、積極的に考え始めています。その意味では、共同研究が良い役割を果たしていると言えるでしょう。(談)



アジア研究教育拠点事業  
「東アジアにおける法の継受と創造」  
事業概要は専用ホームページからご覧いただけます。  
URL <http://www.law.hit-u.ac.jp/asia/>

## 背景を伝えることが「理解」へとつながる

美術品や工芸品を展示するとき、私たちは観る人にそれらを「理解」してほしいと願っています。何を理解してほしいと願っているのか。優れた作品であれば、その作品の持つ美や技は、観る人の心を自然に捉えます。感動や憧れを呼び起

こすかもしれません。でも、それだけでは十分な「理解」とは言えないのです。その作品の背景、つまり生み出された時代や歴史、文化といったコンテキストを的確に伝えることが「理解」への大きな一歩となるのです。

実例をお話ししましょう。私はイギリスにて日本の現代工芸の展示会に関わったことがあります。そこで展示された作品の一つに、現代の工芸作家がつくった素晴らしい蒔絵の箱

# メッセージを送る技術・背景を見る目が 日本文化への正しい理解を世界に届ける

2010年2月3日～9日、言語社会研究科において、ニコル・クーリジ・ルーマニエール博士（英国セインズベリー日本藝術研究所所長）による集中講義を開催します。日英両語による講義とディスカッション、美術館等の見学を行うこの授業のテーマは「日本を展示する」。ワークショップ的な要素も持つこの講義を通して学生たちに伝えたいものは何か、何を学びとってほしいのか、ニコル博士にお話をうかがいました。



ニコル・クーリジ・ルーマニエール  
Nicole Coolidge Rousmaniere

英国セインズベリー日本藝術研究所所長 米ハーバード大学Ph.D（美術史）  
学生時代に来日。日本美術、とりわけ陶芸に魅せられる。  
大英博物館など多くの博物館・美術館での展示プロジェクトに関わっているほか、  
装飾美術と装飾の概念、東アジアにおける近代陶磁器と貿易ネットワーク、  
および蒐集の歴史についての研究を行っている。





がありました。その繊細な美しさはイギリス人にも評価されますし、漆という素材は英国でも17世紀から知られています。でも、そこに甘えては、表面的な素晴らしさしか伝わりません。たとえば、いま日本で使われている漆の99.5%は中国からの輸入品であるにもかかわらず、この蒔絵の箱は純日本産の漆が使われていること、その制作には1カ月もの時間を必要とすること。こうした事実や背景を伝えることが、観る人の「理解」へとつながっていくのです。

大英博物館で開催した「土偶展」のカタログに、土偶の写真図版や考古学や美術史的観点からの解説だけではなく、遮光器土偶をシンボルにした駅舎や「ドラえもん」など土偶が登場するマンガを紹介したのも同じ理由からです。縄文時代の土偶が現代日本の生活や文化の中にどんな風に溶け込み、受け取られているのかを伝えることで、日本や日本文化への理解を深めてもらいたいと思ったのです。

当然のことですが、その国の人ならすんなりわかるその国の文化を、他の国の人が同じように理解できるとは限りません。その国にとっては当たり前のことが、他の国ではそうではないケースも多々見られます。ヨーロッパ圏でも、イギリス、フランス、ドイツではそれぞれ社会文化の背景がまったく違います。ある作品を通して伝えたいメッセージを、誤解なく相手に受け取ってもらうためには、その相手の人のいる国に対する理解もまた不可欠だということです。

ての万国博覧会やナチスドイツの例にみられるように、展覧会は宣伝やプロパガンダの一環として行われる場合もあります。また、新市場の開拓や経済効果を期待して開催されるケースもあります。展覧会を美術や文化の面だけから見るのではなく、社会や経済の側面から捉えることもまたとても重要なことです。参加する学生にはそうした背景を「見る目」や「見る技術」も学びとってほしいと願っています。

ワークショップでは、講義やディスカッションのほか、中近東文化センターや三鷹の森ジブリ美術館など、近隣の美術館などの見学を予定しています。本物を見て、その作品がもつ雰囲気や五感を捉えてほしいからです。美術品でも工芸品でも、それらの良さが実感としてわかることが、展示に関わる人の必須条件。展示することは、モノのもつ良さや価値、背景を観る人に伝えることだからです。

残念ながら日本では、「国際社会での展示法」への認識も実践もまだ充分であるとは言えませんし、「日本を展示する」プロフェッショナルも、東京国立博物館で少数のデザイナーの方が活躍されている程度です。今日、日本のポップカルチャーは世界の若者の強い関心を集めています。「ワビサビ」は、世界語にもなっています。そうした時代だからこそ、「日本を展示する」プロヤスキルがもっと育ってほしいと思うのです。1週間という短い期間ですが、このワークショップがそのきっかけの一つになれば嬉しく思います。(談)

## 「背景を見る技術」の重要性

ワークショップを通じてもう一つ学生に伝えたいのは、「展覧会に込められたメッセージ」や「展示物の背景」に着目してほしいということです。かつ



SAINSBURY INSTITUTE  
FOR THE STUDY OF JAPANESE ARTS AND CULTURES  
ANNUAL REPORT 2006-2008より

## プロジェクト「東アジアにおける共通感覚(コモンセンス)の深化 ——教員相互派遣型国際研究教育ユニットの編成を通して」で、 東アジア研究に関する大学院教育の国際化を加速

言語社会研究科はこれまで、ワークショップやシンポジウムなどの共催を通じて中国の復旦大学・上海財経大学、台湾の国立政治大学、韓国の延世大学・成均館大学・韓国国立国語研究院など東アジアの大学、高等研究教育機関との研究交流を重ねてきました。この成果をさらに発展させるべく、今年度から、一橋大学戦略推進経費の支援を得て、上記のプロジェクトを開始しました。

このプロジェクトは、韓国、中国、台湾の主要大学と言語社会研究科が教員を相互に派遣、派遣先には2～3週間滞在し、相手側の教員と協力して授業とワークショップなどを担当する、というものです。大学院教育の多様化、国際化を促進するとともに、東アジアの人文的研究に関する地域ネットワークを構築し、グローバルな情報発信、欧米等他地域からの研究者・学生の受け入れをめざしています。

リーマン・ショックによる経済不況や環境問題。いま世界は多くの課題を抱え、日本も厳しい局面に立たされています。かつて日本は、「ものづくり」によって戦後の厳しい時代を乗り越え、経済大国へと発展してきました。今のピンチをチャンスに変える方法を模索する。こうした問題意識を背景に「商」の伝統校である一橋大学の同窓会（如水会）と「工」の伝統校である東京工業大学の同窓会（蔵前工業会）とが合同移動講座を共催することになりました。第1回のテーマは「ものづくりと日本経

済」、開催地は「ものづくり都市」として歴史のある浜松です。ゲストパネリストとして、スズキ株式会社の代表取締役会長兼社長の鈴木修氏、ゲストモデレーターとして浜松出身であり東京工業大学OBでもある日本放送協会（NHK）元会長の橋本元一氏を迎え、「ものづくり」という視点から「日本経済の未来」について語り合いました。会場には、700名もの聴講者が集まり、熱心に耳を傾けていました。今後年に一回のペースで、両校同窓会の共催による合同移動講座を、各地で行う予定です。

# 「商」の知、「工」の力。

**第1回** 一橋大学・東京工業大学合同移動講座が、「ものづくり都市」浜松で開催されました





## 第1回 一橋大学・東京工業大学合同移動講座

テーマ

### ものづくりと日本経済

プログラム内容

■ 基調講演 (1) 一橋大学長 杉山武彦  
「ものづくりと日本経済—物流と社会資本整備の視点を中心に—」

■ 基調講演 (2) 東京工業大学学長 伊賀健一氏  
「ものづくりと日本経済—フォトンクス研究を中心に—」

■ パネルディスカッション

■ モデレーター

■ パネリスト



日本放送協会 (NHK)  
元会長  
橋本元一氏



スズキ株式会社  
代表取締役  
会長兼社長  
鈴木 修氏



東京工業大学学長  
伊賀健一氏



株式会社日立製作所  
相談役  
蔵前工業会理事長  
庄山悦彦氏



新日鉱ホールディングス  
株式会社  
代表取締役社長  
如水会理事長  
高萩光紀氏



一橋大学長  
杉山武彦



## 「商」の教育と 「工」の教育の両雄

商法講習所 (1875年設立) を祖とする一橋大学と東京職工学校 (1881年設立) を前身とする東京工業大学は、開学当初より深い関係にありました。一橋大学の設立に尽力した渋沢栄一子爵と東京工業大学の前身、東京工業学校の校長であった手島精一先生は、近代日本をつくり上げた「商」、「工」の立役者であり、お互いに尊敬しあう間柄でした。大正5 (1916) 年、手島先生の勲一等瑞宝章受章祝賀会に駆けつけた渋沢子爵は「私は商の世界で頑張ってきたが、手島さんは工の世界で活躍された。これからは工と商、力を合わせて精神面の教育でもしっかりやりましょう」と挨拶されました。



# 現行の「税と社会保障」の制度は、高度成長期の遺物 制度改革のためには、データに基づく分析評価が不可欠

## 「税と社会保障」のあり方は 国民みんなが考えるべき課題

「税金は高いし、年金は少ない。制度は複雑でよくわからない」。いまこう思っている人も多いことでしょう。所得税や住民税、消費税などの税金、年金、医療、雇用、介護等の社会保障は、国民の生活に直接関わるものです。でも、その中身や仕組みには、様々な課題があることもまた事実です。

なかでも大きな課題の一つは、「税と社会保障の一元化」です。「一元化」にはいろいろな意味があります。国民にとっては、税金も社会保険料も支払う「サイフ」は一つです。一方、税金も社会保険料も所管省庁は複数にまたがっており、制度面でも運用面でもほぼバラバラというのが実情です。2004年の年金改革の時に、厚生労働省は、年金保険料の上昇を抑制するためには、基礎年金の国庫負担率(税金で賄う割合)を1/3から1/2に引き上げることが不可欠だと説明しました。「おかしい」と思いませんか。社会保険料で賄う部分が減り、税金で賄う部分が増えると、国民の負担は楽になるのでしょうか。税金は誰が負担するのでしょうか。国民以外にないはずですか。

「一元化した方がわかりやすいのに」と素朴な疑問を抱きたくなくなるのもムリはないというものです。「税と社会保障の一元化」は、税や保険料の徴収が効率化するだけではありません。現在、基礎年金の財源の半分は税金ですが、基礎年金は、40年間加入していれば、一人毎月約6.6万円が支給されます。保険なので、所得水準は関係ありません。しかし、高所得の年金受給者にも税金で年金が支払われているということは、その年金は所得の低い人が払う消

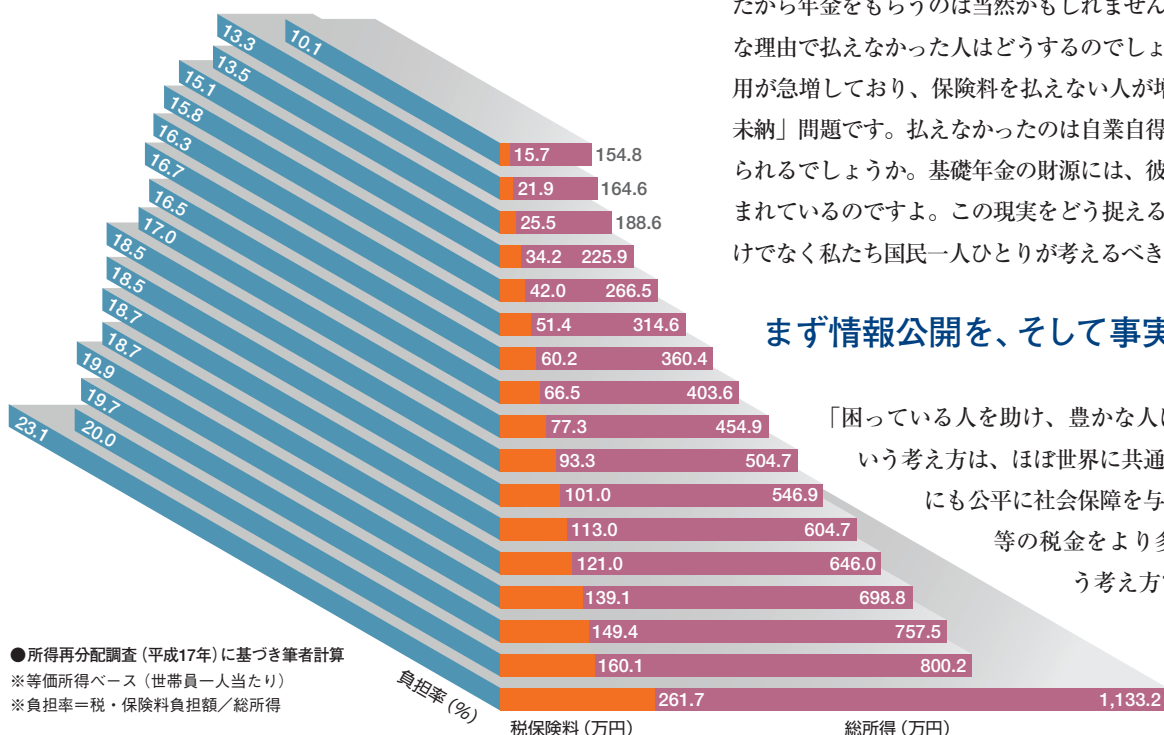
費税の一部によって賄われているともいえます。また、国民年金の保険料は、所得の低い人には部分的な減免制度がありますが、年収が300万円でも1億円でも、毎月一人約1.5万円です。民間の保険ならともかく、公的な制度として公平といえるでしょうか。減免を受けると、年金額は減額されてしまいます。基礎年金とは老後生活の基礎部分を賄うはずなのに、保険料を満額払っても、実は生活保護の水準より低いのです。要するに矛盾だらけなのです。

「税と社会保障の一元化」の議論を進めるにせよ、現在の制度を維持ないし見直しするにせよ、忘れてはならない課題があります。それは、「どういう人がどれだけ負担すべきか」。つまり、税金と社会保険料はどのように負担すべきか、その給付はどうあるべきか、ということです。これも素朴な感情でいえば、「多くの収入を得ている人は多く支払うべきでは」となるでしょう。税金についてはそうかもしれません。では、社会保険料はどうでしょう。「高額所得者は公的な保障がなくてもいい」のでしょうか。それとも「全員平等に一定水準の保障が受けられるようにすべき」でしょうか。あるいは「保険料を払わなかった人は社会保障が受けられなくても仕方がない」のでしょうか。

実は、こうした「税金と社会保険」のあり方は、国によって考え方が異なります。たとえば、カナダは、40年間住んでいれば、高額所得者を含め基礎年金額として一律月約4.5万円を給付する制度を導入しています。ただし、高額所得者には、年金特別課税("Recovery Tax"と呼ばれる)が課せられ、基礎年金相当額は税制を通じて実質的に削減されます。オーストラリアの基礎年金は、所得が高い人は減額されます。一方、日本は「保険料を払った人は給付が受けられる」という保険主義の考え方です。保険料を払ったのだから年金をもらうのは当然かもしれませんが、逆に失業など様々な理由で払えなかった人はどうするのでしょうか。最近、非正規雇用が急増しており、保険料を払えない人が増えています。「年金の未納」問題です。払えなかったのは自業自得だといって、切り捨てられるのでしょうか。基礎年金の財源には、彼らが払った消費税も含まれているのですよ。この現実をどう捉えるべきか、これは行政だけでなく私たち国民一人ひとりが考えるべき問題だと思います。

## まず情報公開を、そして事実による議論を

「困っている人を助け、豊かな人に負担してもらう」という考え方は、ほぼ世界に共通しています。豊かな人にも公平に社会保障を与えるが、その分所得税等の税金をより多く払ってもらうという考え方です。でも、日本の場



●所得再分配調査(平成17年)に基づき筆者計算  
※等価所得ベース(世帯員一人当たり)  
※負担率=税・保険料負担額/総所得



合、実は税金+社会保険料の負担率には年収による差はさほどないのです。左ページのグラフは世帯の所得税・社会保険料負担を一人当たりでみた場合の税金・社会保険料の負担率です。一人当たり年収が300万円で16%、同800万円で20%の負担率ですが、これには消費税が入っていません。消費税は低所得者ほど負担率が高い逆進性を持っているので、消費税も加えて負担率を考えると、大雑把に言って、所得にかかわらず、20%前後になると見込まれます。

福祉が充実した国家の代名詞として、よくスウェーデンの名前があげられます。しかし、スウェーデンは「みんなが働く」ことを前提としたきわめて厳しい制度を導入しています。女性の平均賃金は男性の約80%あり、職業にかかわらず、所得に応じて年金保険料を納めます。自営業者は、自身が雇い主でもあるので、保険料はサラリーマンの2倍になります。年金収入が最低保障水準以下の場合、その差額を税金で補ってしてくれます。ありがたい制度のように見えますが、若い時は、職業訓練などを受けて、とにかく働いて所得を稼ぐ構造になっています。所得を稼ぎ、経済が成長しないと、手厚い社会保障制度を維持できないと考えられているからです。

税金と社会保険料の負担の問題は、立場によって利害が対立します。それだけに、重要なのはまず事実を明らかにすること。そして、その事実をしっかり分析した上で、十分な議論がなされるべきだと思います。最近ようやく貧困率が発表されたように、税金や社会保障に関わるデータの公開は、残念ながらまだ十分とはいえないのが実情です。日本という国の将来と国民一人ひとりの生活に関わることで、政府も行政もキチンと情報公開すべきだと思います。

## 行政は間違わないという前提は間違い

現在の税金と社会保障に関わる制度は、その大半が高度成長期につくられたものです。終身雇用と右肩上がりの経済成長を前提とした制度だということです。終身雇用が崩壊している、若い年代に非正規雇用が増えている、右肩上がりの成長は当然望めない——こうしている時代に合わなくなっているからこそ、様々な歪みが生じているのです。

税金と社会保障に関わる制度は、時代と社会環境に合わせて評価し、検証されなければならないと思います。しかしながら、残念なことに、日本の政策決定過程には問題があります。たとえば、これまでの改革では、役所の審議会で検討し、役所と与党が調整した後、国会で審議するという形でした。審議会での検討は役所の意向が反映されるように誘導され、また与党との調整は必ずしもオープンではありませんでした。最近の例を挙げれば、後期高齢者医療

制度です。家族形態や所得別に保険料がどう変わるかといった基本的なデータは、制度検討の際には十分公表されませんでした。制度が実施されて、役所が追及されてからデータが出てきました。

一言でいえば、日本の政策決定過程は拙速で十分な検討が行われていません。最後に意思決定するのは大臣ですが、その前のプロセスが重要です。たとえば、イギリスなどでは、役所が論点整理ペーパーを発表し、それについての様々な意見を聴取したり、数人の専門家に真に専門的かつ独立的な観点からの分析や評価を依頼したりします。専門家が作成した報告書に基づき、政府が改革案や選択肢を検討し、それをさらに世の中に公表して意見を求めます。負担が現在どうなっているか、改革案によって何がどう変わるかが、詳細に明らかにされます。また、制度実施後も、予定したとおりの結果になっているのか、検証が行われます。人間のすることだから間違いがある、だから予測と結果がどの程度違っているのか常に評価・検証し、見直していくべきだという考え方です。これに対して日本は「間違わない」という前提に立っています。

冒頭に、日本の年金の保険料や給付の問題を申しあげましたが、こうした点は、審議会など政府の資料ではほとんど分析されていません。問題が分析されないのであれば、どうして制度改革の検討ができるのでしょうか。正しい診断なしに正しい政策はできません。日本の問題は、年金や医療の政策そのものよりも、それをつくる過程にあると思っています。一つひとつ検証し、「国民がどうしたら幸せになれるか」という観点から議論を喚起していかなければならないと思います。特に、研究者は、政策立案に関与し、もっと積極的に議論に参加していくべきではないでしょうか。

税金と社会保障に関する私の研究でいえば、いま事実のあぶり出しが終わり、分析の段階に入っているところ。次のステップはそれを政策提言につなげ、議論を喚起する一助にしたいと願っています。(談)



経済研究所准教授

**田中秀明**

Hideaki Tanaka

東京工業大学大学院修士課程修了(社会学)。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス修士課程修了。東工大大学院修了後、(旧)大蔵省に入省。(旧)厚生省老人保健福祉部、外務省在マレーシア日本大使館財務アタッシェ、内閣官房など、多彩な職務を歴任。オーストラリア国立大学客員研究員等を経て、2007年から現職。行政官のバックグラウンドをもつ研究者として活躍中。政策研究大学院大学客員教授、財務省財務総合政策研究所コンサルティング・フェローも兼務。現在の研究テーマは、社会保障に加えて、予算・会計制度や公務員制度などの政府部門の改革、高等教育財政など。民主党政権が設置した国家戦略室の「予算のあり方に関する検討会議」の有識者の一員でもあり、諸外国での経験も参考にしながら、日本における具体的な予算制度改革を提案している。

# 経済学のルーツはオイコノミア OIKONOMIA。

だからキリスト教ローマ帝国の「救済の摂理」が気にかかる



## 近代文明と一橋大学

一橋大学は、建学（1875年）以来、ヨーロッパの学問に範をとって学科を編成してきました。西欧の技術やノウハウを導入することは、近代日本を形成する上で重要な課題にはかかなりませんでした。が、他方で、ヨーロッパ社会の基層文化を理解することなしには、それらが、われわれ日本人、アジア人にとって、真に役立つ学問となるはずもありませんでした。経済史という学問分野は、まさにこの近代経済社会の形成過程を分析しながら、彼我の社会論、文化論を考えています。

例えば、西欧やアメリカのマネジメント論の根底には、個人主義的人間観があります。ところが、日本人やアジア人には、マネジメントの対象として個々の人間を見る姿勢とは別の、固有の人間関係が伏在しているようにも見えます。朋輩や仲間という意識。契約ではなく、互酬の原理で結びあう人間関係。そういった人間存在のあり方が、社会の編成原理にどう反映しているのか。これは、社会を観察する上での重要な観点といえるでしょう。

## 現代文明の源流にさかのぼる

一橋大学の文明史の伝統は、視野の広さと分析の深さまで比類ないものです。本学の黄金期を支えた三浦新七先生（1877-1947）は、輸入し得べきヨーロッパの学問、技術、制度の根底にある価値観や個性を、それとして捉えようとされました。そして、その歴史的個性を把握するために、非ヨーロッパ地域の個性的把握に努められた。その比較文明論の中でこそ、特殊ヨーロッパ的な舞台装置を歴史形成論的に掴まえることができる、というわけです。世界標準化した近代西欧の制度や価値観を、人類史の展望の中で洞察する。比較文明論という壮大なプランの中で、暗黙知を含めた日本人の常識を客観的な言葉で確認しながら、世界標準

化した価値を取り入れようとしているのです。

私の研究の核にあるのは、今のイスタンブールを中心として存在したビザンツ帝国です。アメリカ社会を中心とした現代世界の一元的な世界観や行動の淵源は、このビザンツ帝国にある、と考えるからです。キリスト教化したローマ帝国の遺産が、西ヨーロッパやロシアを経由して、現代世界をかたち作っている。まさに現代文明の源流を訪ね歩いている、と考えています。

## 文明論が必要なわけ

いろいろな価値観をもった人びとが同じフィールドにいるというのが、今日的現象でしょう。ヒト、モノ、カネ、情報が行き交う世界、多様なベクトルの合流地点としての時空間、があるのです。価値共存の世界にいるわれわれとしては、そのような世界でどうコミュニケーションを構築するかは、大きな課題でしょう。それには、ディシプリンベースのツールだけでは不十分です。ツールを扱う人間への深い共感と、共通知としての文化、文明への理解が必要だと思います。ツールばかりでなく、そのバックグラウンドも一緒に理解しよう、という姿勢が求められるといえるでしょう。

## オイコノミアとは「救済の摂理」

経済学にはいろいろな切り口があります。理論経済学や、数学を駆使して定量分析する分野と並んで、経済社会の構造原理を解明する定性分析も大切です。

エコノミクスの語源を知っていますか。オイコノミア (Oikonomia) というギリシア語です。これは、オイコス (Oikos = 家) とノモス (Nomos = 法律、摂理) が結び付いてできました。古代ギリシアでは、家父長が統べるイエ経済を意味しましたが、2～3世紀、テルトゥリアヌスによって新しい用語となりました。この言葉が、



巡りめぐって「経済学」となるのです。

18世紀に至るまで、オイコス・ノモスは、多様な分野を含んだ前近代的な「家政」を指していたようです。そこには、動植物についての知識から、農業、林業、気象学、天文学までが含まれていました。テリトリアヌスたちキリスト教徒によれば、それはいわば「世界」を統御する神の摂理にもとづく事象であって、「神の家」(宇宙)の摂理ということになるのです。キリスト教世界的なこの用語を、私は「救済の摂理」と訳しました。

貧困問題や所得再分配論、資源問題など、今日的な問題群も、古来「救済の摂理」に属する主題だった。近代国家の福祉制度も、前近代世界における慈善活動も、同根なのです。哲学的テーマであると同時に、すぐれて現実的課題が、そこにあるのです。

## 中世ローマ帝国との出会い

私が取り組んだテーマは、ギリシア的規範にローマ帝国とキリスト教の理念が結び付いてビザンツ世界で形成された、以上のような原理にもとづく制度の分析でした。

大家族的な家父長制にあっては、「貧困」はイエ経済のうちに解消されています。家父長が一族郎党の面倒をみている世界を想像したらよいでしょう。キリスト教化の進展に伴って、〈個〉の意識が浸透し、各〈個〉が「世界」に放出される、という大転換が「古代末期」(4～6世紀)に進行します。神と向き合う〈個〉の叢生です。この世界では、共同体的互酬関係よりも、自律的個人の哲学が優先する。つまり、個人の資質と努力に応じて、世俗的栄達への可能性が開かれるとともに、共同体の保護から解放された分だけ、物質的(=経済的)貧困の脅威にさらされる危険性も出てきたのです。

その事態を、キリスト教徒の皇帝が「救済」する、という仕組みができあがった。教会が果たす貧民救済の機能に対応し、これに免税措置を与えて、国家=教会の機能的連携ができあがったのです。この仕組みこそが、ヨーロッパの基層文化の根底にあるのです。

このような研究に取り組む契機となったのは、大学に入る前に、一橋の先生方が書かれておられた書物と出会ったことでした。

増田四郎先生の『大学でいかに学ぶか』(講談社現代新書)は、自身の研究テーマを立てることの重要性を平易に説かれて、実に魅力的でした。また、渡辺金一先生の『中世ローマ帝国—世界史を見直す—』(岩波新書)は、まったく歯が立ちませんでした。中世に屹立する世界帝国の魅力を縦横に語られて、私にとっては決定的な出会いとなりました。入学後は、ドイツ中世史の山田欣吾、阿部謹也の両先生からも指導をいただき、大学での勉強の意味を教えてくださいました。パウロではないですが、まさに、目から鱗が落ちる、思いでした。

## 私は近代人か? と問うこと

私がいつも授業の最初で問うのは、「われわれは近代人か?」ということです。

私は、かつて時間割と一緒に揃えようとして、クラスメートに「この科目を取ろうよ」と提案したら、「Mind your own business」と言われたことがあります。「ほっといてくれ」というわけですね。彼には、目指す目標があって、有機的で無駄のない時間割を考えていた。これこそ欧米流の個人主義ですね。その時の私はそうではなかった。もちろん、共同体的で互恵的な人間関係は重要です。それは、よくいえばチームプレイであり、日本的徳目ですらある。しかし、当時の同級生がそうであったように、どうも欧米社会は違っている。

## 歴史と世界を見直す眼

繰り返し言えば、私がビザンツやヨーロッパの中世社会を研究するのは、古代末期に淵源をもつ価値観や世界観、人間観が、歴史の現実として世界標準化したわけを知りたいからです。はるか昔の地中海世界で生成された理念や制度が、今日の礎を提供した。そう考えると、EUに継承されているヨーロッパ・地中海世界の地域的個性が、無類に面白く感じられてくるのです。

20世紀の経済史学は、近代国民国家史観に立っている。その国際競争史としての英独仏比較史論、各国民国家における社会階層(階級)論が、議論の中心にありました。21世紀の今こそ、この学問史の批判的検証をすべきときなのかもしれません。19世紀以来の学問と大学という制度の変遷の中で、ネガティブな価値評価とともに隠蔽されてきたものが数多くあるのでは、と思う昨今です。

社会思想の水田洋先生(名古屋大学名誉教授)や、経済学の伊東光晴先生(京都大学名誉教授)といった泰斗からお話しを伺う機会があります。本学の卒業生でもある碩学から、「近代人」なる人間類型の生誕と、本学が果たした役割、その歴史的位相について考えるキッカケをいただけるのは、誠に有難いことです。学べば学ぶほど、一橋大学は、昔も今も、実に宏壮で奥深い知の殿堂なのだな、と痛感する毎日です。(談)



経済学研究科教授

大月康弘

Yasuhiro Ohtsuki

1985年一橋大学経済学部卒業後、同大学院経済学研究科入学、1990年同研究科博士後期課程単位修得退学、一橋大学経済学部助手、1991年成城大学経済学部専任講師、1994年助教授、1996年一橋大学経済学部助教授、2006年一橋大学大学院経済学研究科教授。その間に、バリ第一大学客員研究員等。著書に『帝国と慈善 ビザンツ』(創文社)(第49回日経経済図書文化賞受賞)など。

連載企画

世界を解く

第十七回テーマ

「信じる」



学ぶ、働く、遊ぶ…。

人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、

そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一変し、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第17回のテーマは、「信じる」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「信じる」という言葉が連想させる今日的諸問題を語っていただきました。

e s s a y  
言語社会研究科教授 ● 糟谷啓介

## 「平行線は交わらない——ほんとうに？」

ひとを信仰の道に導くにはこんなやり方があると、どこかで読んだことがある。身の回りの出来事を取りあげて、その理由を問いつづけていくのである。「どうして木は燃えるのですか」「炭素が入っているからです」「なぜ炭素は燃えるのですか」というように。そのうち相手は理由が見当たらなくなって、「それはただそうになっているからです」としか言えなくなる。そのとき「それは神がそのように創造したからです」とおもむろに答えるというのである。

ところが、この問いかけを社会のなかの出来事に向けると、話はとたんに物騒になる。たとえば、料金を払わずにバスから降りようとするなら、きっと運転手から「お客さん、料金払ってよ」と言われるにちがいない。そのときこんな風に答えたら、どうなるだろう。「なぜ払うんですか」。そしてどんな返事にも、「それはなぜですか」「それはどういうことですか」と問いつづけるのである。おそらく面倒くさがって放免してくれるか、思い切り叩きのめされるかのどちらかだろう。いやもしかしたら、数日は不慣れな場所で寝起きしなければならなくなるかもしれない。

実際に社会学者のガーフィンケルは、学生たちに命じて、この

ような問答法を実践してみることを提唱した（自分ではなく学生にやらせたのはさすがである）。そうすれば、この社会のなかの知識や行為は、すべて根拠のない暗黙の想定からできていることがわかるのだという。なるほど、これはソクラテスを思わせるようなやり方で、あの哲学者が毒を飲まなければならなかったのもわかる気がする。

たしかに、「知ること」の地面を掘っていけば、「信じること」の岩盤につきあたる。しかし、そのこと自体に不思議なことはない。あのユークリッド幾何学でさえ、五つの公理を証明不要なものとして出発しなければ、厳密な体系を築くことができないのだ（しかし公理は無条件の真理ではない。だって球面で平行線は交わりますよね？）。わたしたちの人生の場合、その公理が何なのかをはっきり言えないだけなのだ。そうはいっても、少なくともわたしは、「わたしが生まれる前から大地が存在していた」ことや、「わたしがいなくなっても、木々のツグミは歌を歌いつづける」ことくらいは知っている。いや、「信じている」というべきだろうか。



## 経営者を信じない

企業統治（コーポレート・ガバナンス）の眼目は、経営者（社長）による規律ある経営－健全で活力ある経営－を確保することにあります。この10年余りの間に、我が国でも企業統治をいかに強化するかの議論が活発に行われてきました。また、そのための具体的な方策が、会社法などの公式な制度として、あるいは企業が自主的に行う慣行として、いろいろ取り入れられてきました。委員会設置会社という新たな統治形態の選択が可能になったこと、社外取締役を置く（あるいは増員する）企業が増えていること、などはその代表的な例でしょう。

どんな方策であれ、それらを支えるこれまでの企業統治の議論のほとんどは、「信じる」こととおおよそ無縁だと言わざるを得ません。経営者のことなど端から信じていません。株主総会と取締役会を通じて（たいていは形式的とはいえ）選ばれ、株主はもとより従業員やその他多くの利害関係者の福利を左右する、そういう存在である経営者のことを、信じていないのです。放っておけば悪事を為すか怠慢になるかする経営者をいかに抜かりなく見張るか。今日の企業統治の議論は、このような経営者性悪説に基づいた、経営者に対する不信の上に成り立っているといって差し支えないでしょう。

しかし本当にそれでよいのでしょうか。3つの点から考えてみたいと思います。

## 「性悪説」の限界

第一に、本当に経営者の性は「悪」なのか。「隙あらば他を犠牲にしても私利を図ってやろう、手抜きをしてやろう」と絶えず企んでいるのでしょうか。「そうだ」と言いたくなる経営者が世の中にいることは否定しません。でも、たいていの経営者は、「自分の職責を立派に果たしたい」「高い成果を挙げて、従業員・株主・顧客などの利害関係者の期待に応えたい」と（も）思っているではありませんか。その限りにおいて、経営者の性は「善」と言えます。「そんなこと思ったこともない」という経営者がどれほどいるのでしょうか。

そう思いながらも、人間ですから私欲に負けて「悪」に走ることもある。とはいえ、「だから性悪説だ」と決めつけるのは乱暴でしょう。人間一般と同様、経営者（という人間）にも、性悪説の一面だけでなく性善説の一面もあると考えるのが自然です。もっとも、どちらか一方を、と言われれば、私なら性善説の側に立ちます。しかし性悪説の側に立つ人もいます。そこで次の論点です。

第二に、性悪説をとって経営者を信じないことが、何か悪い作用を生み出すことはないのか。「ある」と明確に答えた人の一人に、スマントラ・ゴシャルという経営学者（故人）がいます。「（欧米の）ビジネススクールの学生は、『経営者は信用ならない』と習う。だから彼らが実際に経営者になると、その行動は習ったとおり、信用ならないものになる」。譬えは悪いですが「人を泥





棒と呼ばば、彼は盗むだろう」という警句が思い出されます。そうであれば、話はよそ事では済みません。世を挙げて「経営者は信用できないから取り締められ！」と唱え続けた結果、「経営者とは所詮そういうものだ」と世の経営者自身までもが思うようになっては困ります。もしそうなれば「上に立つ者の矜持」などという言葉は忘れ去られることでしょう。

そうした懸念がありうるとしても、現実には悪事を為す経営者がいることは確かですから、性悪説に基づく統治の仕組みが必要であることは私も決して否定しません。とはいえ、この種の仕組みが限界をもつこともまた事実です。次の論点はそれです。

第三に、性悪説に基づく統治の仕組みを整えれば、経営者の規律が確実に保証されるのか。答えが「否」であることなど知れなかったことでしょう。もはや旧聞に属する話ですが、2001年に破綻したエンロンの取締役会構成は、当時、企業統治上理想的なものの一つとして賞賛されていました。こういう極端な例は措くとしても、一般に、経営者を四六時中監視することなどできませんし、いくら立派な仕組みを作っても経営者は一その気になりさえすれば一それを形骸化させたりすり抜けたりするのはさほど難しくはないはずで

す。そんなことは知れきっている。けれども、大きな不祥事が起きるたびに議論の俎上に載るのは「さらなる監督機能の強化」です。そして実際に強化された監督がいずれ悪い経営者にすり抜けられ……といういたちごっこが続くこととなります。

## 好循環を生み出す「互慮」の関係づくり

以上3つの論点をまとめると次の通りです。(1) 経営者を信じる(=性善説)の根拠はそれなりにある、(2) 信じなければかえって信用のおけない経営者を作り出す恐れがある、(3) 「信じなければ規律が保証される」わけでもない。

それだったらいっそ経営者を「信じる」、つまり性善説で経営者を見ることにしてはどうでしょうか。そもそも、企業のトップとして大きな責任と権限をもつ経営者には「信」を置かざるを得ない、信じて任さざるを得ない、というのが企業を取り巻く様々な利害関係者にとっての実際にはありませんか。「信」という語の前には、「好むと好まざるにかかわらず」、そして「程度の差こそあれ」という挿入句は必要かもしれませんが。いずれにせよ、性善説に基づき経営者を「信じる」という立場があってよいと私は思います。

さて、ここまでは経営者にとって耳触りのよいことを言ってきましたが、企業統治=経営者の規律という観点から大切なのはむしろここから先の話です。企業を取り巻く利害関係者(広く世間も含めて)が経営者を信じるのがよいからといって、経営者自身が「自分は信じられて当然だ」と思っているのは大きな間違いです。利害関係者が「信じること(to trust)」に努める一方で、経営者の方では「信じられること」=「信じられるに足るようにあること(to be trustworthy)」に努める一それも「薄氷を履む」ときのような慎重さをもって努める一必要があります。

では、どうすれば「信じられる」か。それは私などが得々とし

て説くようなことではありません。ただ、企業統治の文脈で取って言うなら、経営にあたって私利を優先したり、手抜きをしたりしないこと、言行を一致させ、宜しきを得た総合判断を下すこと、その積み重ねが大切だということは当然のこととして言えるでしょう。一言で言えば(広義の)「自己規律」、これにかかっているというほかはありません。

「信じる」側が相手を信じるように心掛け、「信じられる」側が相手から信じられるように心掛ける。それは、「信じる」側が端から相手を疑ってかかり、「信じられる」側がいかに関心の裏をかくかに策を巡らすのとは正反対の関係です。後者が悪循環に陥るのは明らかです。それと共に前者が好循環を生むことも明らかです。自分を信じてくれる相手に応えたいと思うのも、こちらの信頼に応えてくれる相手をより強く信じたくなるのも、人間の自然な感情でしょう。こうした好循環を生む相互関係を私は《互慮》と名付けました。そこでは互いが相手を顧慮しているからです。

《互慮》によって経営者の規律が生まれるとしたら、これほど望ましいことはありません。「なんとという浮世離れしたことを……」とおっしゃるかもしれませんが、少なくとも今世紀に入る前の日本の企業では一全面的にとは言いませんが一そここで起こっていたことではないでしょうか。いや、いまま日本の、そして世界の、あちこちで必ず起きているはずで

## 「信じる」を軸にした水平統治

このような《互慮》に基づく経営者の規律づけを「水平統治」、反対に経営者の性悪説的な面に目をむけて取締役や株主らが経営者を取り締まる(つまり世間一般でいうところの)コーポレート・ガバナンスを「垂直統治」と私は区別して呼んでいます。「信じる」のが水平統治、「信じない」のが垂直統治です。

もっとも、水平統治だけで経営者の規律づけには十分だと高をくくるほど、私も単純素朴ではありません。垂直統治の工夫は欠かせません(ただし、前提が正反対の二つをどう併存させるかは難しい問題ですが)。ここで言いたかったのは、世の中があまりに垂直統治の議論に偏っているので、水平統治という、理論的には新しい、しかし現実には古くから存在してきたはずの、統治のあり方にも目を向ける必要がある、ということです。水平統治というレンズと垂直統治というレンズ、この2種類のレンズを併用してこそ、企業統治の実態やあるべき姿が明瞭に見えてくると考えています。

違う考えをもたれる読者も少なくないでしょう。私としては、ただ「信じる」ところを取って世人に問うのが学者の身上と「信じる」者として、管見を申し述べた次第です。

信じる  
世界を解く  
【企業統治】



商学研究科准教授  
田中一弘  
Kazuhiro Tanaka

# 信じる者は救われるか —— 信じるに値するものを問う

リーマン・ショック以降、現在ほど「信じる」ということばが問われている時はないのではないだろうか。誰もが「信じてよいのだろうか」「何を信じればよいのだろうか」と問いかけ、「信じるに値するもの」を模索しているのではないだろうか。

## 七面鳥から学ぶべきこと

「七面鳥がいて、毎日エサをもらっている。エサをもらうたび、七面鳥は、人類の中でも親切な人たちがエサをくれるのだ、それが一般的に成り立つ日々の法則なのだ」と信じ込んでいく…感謝祭の前の水曜日の午後、思いもしなかったことが七面鳥に降りかかる。七面鳥の信念は覆されることだろう」。

以上は、デリバティブ・トレーダーのナシーム・ニコラス・タレブ『ブラック・スワン(上) 不確実性とリスクの本質』(ダイヤモンド社刊)からの一節である(88頁)。ここには、帰納的知識の問題が縮図的に表れている。

七面鳥が観察結果から何事かを学んだとして、「親切にエサをくれる回数が増えて確信が高まり、ツブされる日がどんどん近づいているのに安心感も高まっていく。そんな安心感が一番高くなるのは、リスクも一番高まったときなのだ!でも、問題はさらに一般的だ。ここには経験で得た知識自体の性質が現れている。それまでうまく行っていた何事かがあったのだが——さて、ふたを開けてみると、もううまく行かず、過去から学んだことは、よくても無関係か間違い、悪くすると最悪のほうへ私たちを導いたりする」(同90頁)。

これにはじまり、さまざまな脳認識科学の成果をおりませながら、人間の脳はいかに黒い白鳥のような「ありえない」事象を認識しない性向をもっているかが語られる。見て見ないふりをしたり、認識したものを過去の経験と結び付けて単純化した論理で「理解」したつもりになろうとする、などなどである。リーマン・ショック前から、そのような事象は観察されていたにもかかわらず、金融当局はじめ関係者の反応はまさにその性向によって説明できるのではないか、というのである。

## 投資家が信じられるもの

マイカルという会社を記憶している方も多だろう。平成13年、破綻し、発行していた社債にデフォルトが起きた。戦後では、ヤオハンにつづき2件目の「まさか」の出来事だった。そのマイカル債に投資していた一般投資家がマイカル債を勧めた証券会社を訴える集団訴訟が各地で起きている。投資を勧誘する際の説明が不十分だった、あるいは、当該投資家にリスクのある社債への投資を勧めたこと自体が問題ではないのか(適合性原則)が争点となっている。

説明義務や適合性原則などは、従来、ワラントやEB、変額保険など複雑な仕組み、あるいは見慣れない金融商品で問題とされてきた。社債というのは、株式と並ぶクラシックな金融商品で複雑でもなく、その仕組み、リスクも広く知られている。なのになぜ、説明義務や適合性原則違反が問われたのだろうか。

どうやら、問題とされている社債が一般投資家向けに起債されたのは、機関投資家が見向きもしなくなったためであり、また、勧誘にあたって根拠とされた「投資適格」の格付けは、実際には、有償





で依頼した依頼格付けであって、そうではない勝手格付けでは、デフォルトリスクが高い「投機的」という格付けがなされていた。これらの事情が、販売員にも知らされることのないまま、マイカル債は「安全な金融商品」として売りさばかれた、というわけである。

裁判では、複数の格付けがあったのに依頼格付け（つまりマイカルが有償で依頼した格付け）による「投資適格」という情報しか提供しなかった点で説明が不十分だとされている。「債券の場合、格付けという市場関係者から広く信頼が寄せられている制度があって、第三者である格付機関によって償還の安全性・確実性に関するおよその目安が発表されている。したがって、個別企業の事情に関する情報提供の代替策ないし次善の策として、格付けに関する情報を提供しておくべき」であり、複数の格付けがある場合、業者は顧客に対していちばん悪い格付けを示さなければならないとされている。有利な格付け、しかも、投資適格か投機かの瀬戸際で格付け評価が分かれているときに、有利なものだけを示すのでは不十分だということである。

裁判所は、社債への投資を考える者にとって格付けは信じるに値する情報だとの判断を前提に、都合のよい情報しか与えなかった点を「情報提供が不十分である」と捉えることで、「ありえない」事態がもたらした損失の後始末をつけたことができる。

## 揺るがされた企業開示制度への信頼

西武鉄道事件も投資家にとっては「ありえない」と思われていた事態ではないだろうか。次のような事件である。被告・西武鉄道株式会社は、昭和59年以降、関連会社が所有していた被告会社の株式の数について名義株を過少に記載し、関連会社が実際には発行済株式総数の過半数を超える株式を所有していたにもかかわらずこれを公表せず、証券取引法改正によって大量保有報告書の制度が導入されても、名義株の存在を公表せずにしたため、本来であれば上場できなかつたはずの西武鉄道株式が流通する事態が継続していた。そして、平成16年10月13日、西武鉄道が虚偽記載をしていた事実を公表した。これを受けて、西武鉄道株が上場されていた東京証券取引所は同社の株式を監理ポストに割り当てた後、上場を廃止した。西武鉄道株式を取得していた投資家が、西武鉄道株式会社、株式を所有していた関連会社（コクトを吸収合併したプリンスホテル）、両社の元代表取締役、西武鉄道の元代表取締役の相続人を相手取り、集団訴訟を起している。

一連の訴訟において、投資家の信頼が保護に値すること自体には争いはない。有価証券報告書等の開示書類の重要な事項について虚偽の記載がなされたことにより、投資家が正確な情報に基づいて市場で取引を行う、言い換えれば、公正な市場で公正な取引を行い得る法的な利益を不法に侵害された場合、これにより損害が生じた場合には、同社とその代表取締役は、投資家に対して、投資家が虚偽の記載であることを認識しながらその証券を取得したという特段の事情がない限り、不法行為に基づく損害賠償責任を負わねばならない。

つまり、投資家は開示書類に記載された情報を正確な情報であると信頼して市場において取引を行うことができ、その利益は法的に保護されている。それは、開示制度が証券市場の根幹をなす制度であって、発行者やその代表者は開示内容の正確性を担保する責任を

負っていると考えられているからである。監査証明をおこなった監査法人、取締役や監査役が、虚偽記載を監視する義務、あるいはこれに虚偽がない旨の証明を与えたことを根拠に責任を問われるのも同様の考えに基づくものといえる。

とはいえ、西武鉄道事件にも難問が残されている。投資家が被った損害とは何かについては考え方が分かれる。西武鉄道株式を取得したこと自体が損害なのか、それとも、それは西武鉄道株式が無価値であることを前提とする論理であって到底認められず、仮に真実の情報が開示されていた場合になっていたと考えられるもう少し安いはずの価格と取得時に支払った価格との差額なのかというものである。

## ふたつの事件からみえてくるもの

考えてみれば、投資家がいくら損害を被ったとしても、それはリターンの裏側にあるリスクが顕在化したただけのことで、投資の結果として自ら引き受けなければならないのが原則である（自己責任原則）。しかし、それには自己責任を問う前提条件が投資家に与えられている必要があり、投資家に発生した損失を相手に損害賠償という形で負担させ得るか否かはまさにこの問題であるということができる。投資家が投資判断をする際に与えられていた情報が「信じられる」べきものであったにもかかわらず、重大な裏切りがあったことが問題なのである。西武鉄道事件では開示書類に虚偽記載があったという「信じられるべき」制度を欺いたこと自体に、マイカル事件では社債発行者の信用リスク情報を格付機関に頼るのはよいにしても複数のなかから好都合の格付けのみを提供した点に、重大な信頼の裏切りがあるとされたのである。

## 七面鳥や黒い白鳥からのメッセージ

ところで、「市場関係者から広く信頼が寄せられている制度」として「信じられる」とされた格付機関であるが、リーマン・ショック以降、格付機関への信頼が揺らいでおり、日本はじめ各国において新たな規制のあり方が模索されている。

しかしながら、冒頭でふれたブラック・スワンの問題提起は、もっと根本的なものであろう。予測やリスク分析「科学」の限界を露呈させたこの本は、今回の金融危機はこれまでのシステム自体の危機である可能性を示唆しているように思われる。この意味で、アメリカやイギリスで投資家保護のあり方を抜本的に見直す動きが報じられていることはもちろんであるが、110余年ぶりの抜本的な改正に向けた民法（債権法）改正において、民法の想定する人間像をめぐる議論の展開も興味深い。経済的合理人に相当する抽象的に自由な「市民」だけでなく、情報や交渉力の格差を踏まえた「消費者」や「事業者」をも規定して現代化すべきではないか、というものである。

# 信じる

世界を解く

【民法】



法学研究科准教授  
角田美穂子  
Mihoko Sumida

# サブサハラ・アフリカの農業…信頼の役割

## 呪いを信じる

ちょうど前世紀の末から今世紀初頭にかけて、西アフリカのコートジボワールのブアケという地方都市に3年間ほど滞在したことがある。当時、その街ではまだ携帯電話を持っている人は少なかったが、すでにサービス圏内になっていた。インターネットへも固定電話回線を通じて何とかアクセスすることができた。だから、サブサハラ・アフリカの中ではまあまあ先進の部類に属していたと言える。しかし人々は、程度の差こそあれ、呪術の力というものを信じていた。彼の地では、働き盛りの成人がしばしば原因不明で急死する。そんな時人々は、「呪われた」と噂するのである。これについては、キリスト教徒もイスラム教徒も関係ない。

他人に呪われる理由は様々である。その中で典型的なのが「金を貸さない」場合である。正確に言うと、「金があるにもかかわらず借金の申し入れを断ると、呪いがかけられる」と信じられている。面白いのはその先で、「借金を返済しないからといって、呪われることはない」と言うのである。このような呪詛の恐怖の存在下では、「借りた金は返さない」というのが最適な行動になる。

天水に依存し生産性の低い農業を主たる生業とするサブサハラ・アフリカは、最近まで、所得や資産の格差の比較的少ない社会であった。土地は豊富にあり、数年ごとに耕地を移動すれば肥沃度は維持できる。栽培するのは肥料に反応しない在来品種なので、種子や化学肥料を購入する必要もない。このような農業生産環境で食料の不足が起こるのは、旱魃や病害虫など予見できない不運に見舞われた時だけである。ある社会の中で、運の良し悪しが毎年ランダムに発生するなら、運の良かった者が運の悪かった者に金（あるいは食料）を貸すのは当然のことであろう。別の年には貸し手と借り手の立場が逆転する可能性があるのだから、「貸せる者が貸す」という規則だけで、返済を明示的に義務づける必要はない。むしろ、「貸しを作る」ことの保険機能が重要なのだ。

運良く余剰が生じた年に貯蓄し（家畜の購入、穀物の保管など）、不作の年に取り崩すという対処の仕方もありうる。しかし、どんなに運が良くても生産が倍増することは希なのに対して、収穫が皆無という不運は時に発生する。このような農業生産の確率分布を考えるなら、不確実な環境を貯蓄だけで生き抜くのは困難であることがわかる。生存のためには相互扶助的な貸借関係が不可欠なのである。さらに、それが保険として有効であるためには、地域一帯で同時に天災を被らないという条件が必要である。実際、サブサハラ・アフリカの天水農業地帯では、作目や品種だけでなく作付け場所や時期についても生産者ごとにバラバラである。意図的かどうかは別として、結果的には地域レベルで生産リスクを分散しているといえる。当然ながら、低い生産性はその代償である。都市や海外からの送金受け取りや非農業収入の家計所得に占める比率が上昇した現在でも、リスクに対する人々の行動の基本にあまり変化はない。





## 他者を信じる

このように、サブサハラ・アフリカの人々は相互扶助を規範として、リスクが分散するような多様な人間関係のネットワークを構築している。これをソーシャルキャピタルと呼ぶことも可能であろう。しかし、ソーシャルキャピタルは一般に「共同行為を可能にするような規範とネットワーク」と定義されている（世界銀行）。これにしたがえば、共同行為を生み出さないサブサハラ・アフリカの規範とネットワークはソーシャルキャピタルとは別物ということになる。ソーシャルキャピタルを構成する重要な要素は、信頼（他者を信頼することおよび他者の信頼に応えること）であるとされるが、サブサハラ・アフリカの社会はおそらく信頼が乏しいのであろう。

アジアの灌漑稲作は、サブサハラ・アフリカの農業生産様式の対極にある。灌漑水田では、農民が集団で灌漑施設を維持管理し、さらに水の配分を調整することで、集団全体の生産リスクの削減と生産性の上昇を実現する。そこで重要なのは、農民集団の協調と共同行為である。共同行為をうまく行うのは、「ただ乗り」の誘因のため簡単ではない。アジアの稲作地帯では、長年にわたる灌漑の経験がソーシャルキャピタルを蓄積したため、集団の構成員間に信頼が醸成され、共同行為を容易にしていると考えられる。

実際にアジアの方がサブサハラ・アフリカよりもソーシャルキャピタルの保有水準が高いのだろうか。ソーシャルキャピタルの水準を計量化し比較するにはWorld Values Survey（世界価値観調査）に基づく手法がある。この調査では信頼について「大方の人間は信頼できる」「人と付き合いときは慎重にしなければならない」という選択肢を回答者に提示し、前者を選んだ人の割合を信頼度の指標としている。1990-91年ころ欧米諸国を中心に世界29カ国で実施した調査によると、アジアは29カ国中3カ国しか含まれていないが、日本40.8%（12位）、韓国38.0%（14位）、インド34.3%（16位）といずれも中ごろに位置づけられた。サブサハラ・アフリカの2カ国は、南アフリカが30.5%で18位、ナイジェリアが22.9%で24位である。ナイジェリアの前後にはイタリア、フランス、チリ、ポルトガルといった国が並んでおり、ナイジェリアがそれらラテン系の国と比べてソーシャルキャピタルが低いということはなさそうである。しかし、アジアの3カ国よりは明らかに低位にある。

## 信頼への投資

長期にわたり経済的に低迷していたサブサハラ・アフリカは、2000年を境によく経済成長を開始した。サブサハラ・アフリカの経済成長は、よく知られているように国際的な資源ブームと海外からの直接投資の増大により引き起こされたものである。その一方で、一部の輸出向け換金作物を除いて、農業は粗放的で低生産性の状態に留った。アジアにおいては、緑の革命

による農業生産性の上昇と農家所得の向上が、経済成長の前提条件となったことが知られている。農業生産性の上昇段階を経していないサブサハラ・アフリカの経済成長は、持続性という点が懸念された。そうした中、2007年に始まった食料の国際価格の高騰が、コメや小麦を輸入に依存するサブサハラ・アフリカの経済に大きな打撃を与えたのである。持続的な経済成長と貧困削減のためには、サブサハラ・アフリカにおいても農業生産性の上昇がまず必要であるという認識が改めて広まったのは、この食料危機の結果である。とりわけ、急増するコメの輸入に対処するには、コメの生産拡大が急務であるとされた。

サブサハラ・アフリカの稲作は灌漑のない低湿地か畑地でもっぱら行われており、生産性が低い。したがって、稲作の生産性を上げるためには、アジアのように灌漑水田を整備する必要がある。灌漑に加えて改良品種と化学肥料を採用すれば、単収がアジア並みに伸びることは疑いない。実は、今までにサブサハラ・アフリカでも灌漑水田が造成されている。しかし、灌漑施設の維持管理が悪いため灌漑実現面積が激減する、投入財の購入のために供与したクレジットが返済されない、などの問題が生じたため、生産性という点では灌漑のない天水田と大差ないというのが実情である。前述のように、サブサハラ・アフリカではソーシャルキャピタルが乏しいため、共同行為を必要とするアジア的な灌漑稲作の実施が困難なのである。ソーシャルキャピタルは、物的資本や人的資本と同様の資本であり、投資により増加する。したがって、現時点でソーシャルキャピタルの水準が低くても、信頼を高めるような投資を続ければいつしか共同行為が容易になるはずである。でも、それにどれだけの時間と費用がかかるのか、今のところ参考になる事例はない。

2009年7月、私は西アフリカのセネガルの北部にあるセネガル川流域灌漑稲作地帯を訪問する機会を得た。驚くべきことに、灌漑稲作は成功しないというサブサハラ・アフリカの通念に反して、灌漑施設は適切に維持管理され、農民はクレジットを利用して十分量の改良品種の種子と化学肥料を投入していた。ヘクタールあたりの籾米生産量は5～6トンに達し、アジアの平均値をも上回る生産性である。

セネガル川流域の灌漑水田は、植民地時代に建設が始まり、独立後はセネガル政府が管理してきたが、1990年代に農民集団に移譲されている。その成功の鍵は、農民集団の持つ高いソーシャルキャピタルにあることは確かであると思われる。彼らがいつから、どのようにしてソーシャルキャピタルを蓄積したのかを明らかにすれば、サブサハラ・アフリカにおける灌漑水田開発にむけて有益な情報を提供できるであろう。もしかしたら、借金を返済しない者に呪いをかける秘法があるのかも知れない。

信じる  
世界を解く  
【開発経済学】



経済研究所教授  
櫻井武司  
Takeshi Sakurai

# ローベルト・ムージルの『トンカ』

自分の彼女が身ごもった。結婚も考えていた相手だ。しかし素直に喜べない。逆算するとそのあたりは、彼女と離れて旅行に出ていた期間なのだ…。

ローベルト・ムージルの短編、『トンカ』の中心にある「問題」は、要するにこういうことだ。もちろん主人公はトンカにたびたび疑問をぶつける。しかしこの朴訥で、口数が少なく、一見すると何を考えているのかわからないが、いざ口を開くといつもごく普通のことしか言わない娘は、彼の質問に対しても、嘘じゃありませんと繰り返すばかり。その顔を見て単純な答えを聞いていると、どうしても信じないわけにいかなくなってしまうのだ。

彼が初め、おばあさんの面倒を見させるのにトンカを雇ったときからそうだった。元からトンカを見知っていて、親戚の縁でトンカに話がいくよう、ささやかな計略を立てたのも彼だったが、そうして来させたトンカと用足して外に出て話をしても、科学者でしかも哲学的思考をもてあそぶ癖のある彼とは今ひとつ話がかみ合わない。

雇い始めてまもなく、きみのような若い娘が、一日中老人の世話をしてていいのかと、彼（名前は僕らには知らされない）は問いたです。トンカは「お年寄りのお相手は好きです」とか、「お仕事ですから」などと答えるので、彼はだんだんいらいらして「きみは他にになにか生きがいはあるの」などと訊く。それも特にないという彼女に、彼はさらに「希望とか、夢とか、野心とか」のことだと追い討ちをかけるが、微笑む彼女はやはりはかばかしい答えを返さない。さらに追及をつづけて「思ったことをいってみない？」と尋ねる彼に、トンカは「お給料をいただかなくてはならなかったものですから」と答える。なんと簡単なこと！

こうした彼女のコトバや、またあるとき彼女が故郷の民謡を歌ったときに感じられた「正しさ」など、トンカに彼が抵抗できなくなった理由はいろいろある。そのへんは岩波文庫に川村二郎訳で『三人の女』という短編集として収められているので、よければ一読していただければと思う。

## 信じるということ

この作品を読むと、信じるということはどういうことなのか、いろいろと考えさせられる。主人公の青年は、けっきょくのところトンカを信じている。それは信じようとしているとか、信じることにしたとかいうことではない。どうしても信じるしかない、というか信じないということがどうしてもできない、という状態ではないだろうか。

このケースは、状況だけから言ったらどう考えてもトンカを信じることはできなそうだ。彼の周りの人間だって、何とか信じようとしているように見える彼を、手の付けようのない頑固者だと思っている。だが彼がもがいているのはおそらく、信じようとしているからではない。

僕は君を信じる、と口でたとえ百べん言ったとしても、気持





ちの上で本当に信じられるかどうかは全然別の問題だ。そして信じるか信じないか、どちらか百パーセントに決まるというものでもない。気持ちでは信じていても、状況しだいではまた何パーセントか何十パーセントは信じない方に針が倒れていくかもしれない。でもそこで、いくら反対側に向かう力が働いても、最終的には信じる方に針がふれる、これが信じるということの奥にある力のような気がする。

## 語り手に耳を傾ける

だが、彼がどうしてそこまでトンカを信じざるをえないのか考えるには、けっきょくは小説そのものを細かく読んでいくしかなく、それはここでしたいことではない。見たいのはもう一つ別の面、つまり読む僕たちが、小説のテキストから、即物的に言えばそこに並んでいるコトバのつらなりから、この彼がトンカを信じているとかどうとかいうことを考えている、ということだ。

しばらく前から、文学的なテキストを読む授業でまず言わなければならないのは、たとえば「このテキストで作者は何々を批判している」というのと、「このテキストでは何々が批判されているように読める」というのは全然ちがうということ、そして普通は後のほうの言い方をしないといけないということだ。同じように、小説の中のことばは、登場人物のせりふはもちろん、それ以外のいわゆる「地の文」でも、「作者が言っていること」とはいえない。では誰が言っているのかとなるが、そこで「語り手」という人物を想定するのが普通のやり方だ。『シャーロック・ホームズ』だとワトソン君という語る人物が作中に堂々と出ているわけだが、そんなふうに具体的に登場しなくても、作品の中では見えない誰かが物語を語っているというわけだ。

## すぐれた小説は、 すぐれた批評性を備える

『トンカ』の語り手は、何を語るだろう。トンカの出自、彼との出会い、祖母の世話をしはじめてからの彼との会話、祖母がなくなってから二人が恋人同士になるいきさつ、彼の家族とのいさかい、トンカの妊娠…、そしてさらにトンカが病気になったこと。それも、胎児から母の血液にうつされるか、あるいは直接男から感染する、恐ろしい潜行性の疾患だという。彼は医師の診断でも「まったく健康」というのだから、この一件は、何か神秘的な力がはたらいて彼をまきこんだのか、それとも彼女がいやしい俗世間の罪を犯したのか、どちらかだという。

ここから、しかしどうしても後者の可能性を信じられない彼は、大ぜいの医者を訪れたりする。医師たちは彼の訴えに直接反論はしないが、彼自身も自分の話の意味はわかっている、つまり処女懐胎は可能かとたずねるのに等しかった、そしてそれには医師たちも、今まで例はありませんと答えるより仕方なかったろう、ともいう。

読む僕たちは、こうした物語から状況を判断して、トンカの言うことが信じられるか、そしてそれをどうしても否定できない彼について、どう考えるか、そう問いかけられているようだ。

それは、くり返しになるが、どう考えても信じられそうもない状況で、しかし、その相手の人柄によって、ことばによって、その顔によって、信じざるをえないということはどう考えるかということだ。そこではまた、経験というものに基く科学の根本にまで疑問がなげかけられ、人を信じるという根源的なできごとのまえて揺るがされてしまうほどだ。

だがこれを考え始めると、僕たちの頭にはもう一つの疑問がわいてくる。こうした問いを僕らに投げかけてくる「語り手」はいったいどういう存在なのか、そしてその語り手の語ることをどのくらい信じられるのか、ということだ。

これは、語り手が嘘をついているんじゃないかという話とは微妙に違う。そもそも小説というものはフィクションなのだから、その意味では「本当」のことなど語っているはずはない。

もしかするとこの話は、僕らの世界とは別の秩序をもつ世界のことという可能性もあるだろうか。もちろん僕たちの世界では（今のところ）ありえない、何万光年先の星々と自由に行き来できる設定のSF=サイエンス・フィクションもじっさい数多くあるのだから、この物語が実は少しばかり構造のちがう世界を背景にしているも理屈のうえでは支障はない。あるいはまた、のっぴきならない客観的な状況にみえるものが、ほんとうは「彼」の妄想に近いもので、そもそも疑いそのものが十分な根拠をもたないのかもしれない。

けれども僕たちは、この短編をおそらくそうしたものと読めない。やはり自分らの身の回りの、聖母マリア以来そうしたことが起こったことのない（はずの）世界で、僕たちと考え方がそう大きくは違わない人々が生き、こうした「出来事」に出会って考え、悩み、そして何かしら自分の中に変化を感じたと思わされてしまう。

けっきょく、彼という青年がどうしてもトンカを信じる他なかったのとまったく同様に、僕たちは語り手を、『トンカ』というテキストを信じる他ない。それはつまりとてつもない理屈によるわけではない。なぜかと訊ねられれば、その語り手が、テキストが持つ何かしらの力のせいとしか言いようがないだろう。

ここで、物語の中のトンカと彼の間におこったことが、そのままテキストと僕たちのあいだにもおこっていることに気づく。文学を読む授業でもう一つ言わなければならないことは、すぐれた小説は、必ずすぐれた批評性をもっている、そしてしばしば「小説というジャンルそのものの批評になっている」ということだ。『トンカ』という小説も、またその例外ではない。

信じる  
世界を解く  
【文学】



言語社会研究科教授  
尾方一郎  
Ichiro Ogata

# Captains

一橋大学創世記。

そこには、新しい価値を創らんとする力があつた。建設者としての誇りと意志があつた。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第3回では、上田貞次郎博士の足跡を追ってみた。

## 第3回

# 上田貞次郎



宮本三郎／画



# 「実証研究」を追究し、 国家発展のための政策提言に奔走する

一橋大学西キャンパスグラウンド脇にある銅像のプレートには、こんな言葉が刻まれています。

「学者は實際を知らず、實際家は学問を知らず、政治は産業を離れ、産業は社会に背く、是実に産業革命の波濤に漂へる現代日本の悩みではないか。吾人は此混沌裡にあって、企業より社会を望み、社会より企業を覗き、眼前の細事に捉われず又空想の影を逐わず、大所高所より滔々たる時勢の潮流を凝視して、世界に於ける新日本建設の原理を探らんとする」

現在にも通ずるようなこの言葉は、上田貞次郎が1926年に創刊した個人雑誌『企業と社会』の巻頭言。理想を抱きつつ現実を見ることで社会原理を探る実証的理想主義を追求し、日本の経営学を確立した上田ならではの視点と言えるでしょう。

上田が活躍した時代は、福田徳三、左右田喜一郎、三浦新七と教授陣が充実し、その社会活動にはめざましいものがありました。さらに、彼らと並んで山口茂、杉村廣藏、村松恒一郎、猪谷善一など、次世代を担う多数の若手教官が育っており、まさに「一橋の黄金時代」でした。



## 若き上田貞次郎に 影響を与えた人々

上田の父、上田章は紀州藩士で、明治時代には紀州徳川家の家扶をしていました。その生家は江戸の町人だったが、儒学をもって紀州家に仕え、士分に取り立てられたのです。上田が2歳の時に父は亡くなりましたが、その門下生たちの影響もあって、父親に武士としての理想の姿を感じていたようです。東京商科大学で上田が「士族たれ」と学生に教えようとしたのは、出自うんぬんではなく、武士の理想の姿に託したノブレス・オブリージュだったのでしょう。

正則予備校（のちの正則中学）では、東京帝国大学に心理学科を創設した元良勇次郎から自由主義を学びます。上田の日記からは、高等商業学校に入学後も教えを請うていることがわかります。また、上田が傾倒していた人物の一人が福沢諭吉でした。日記には、「世の中は見戯なり。されど、其の見戯を直面に受けて世に交わるこそ人間の本分なれとは福沢先生の至言にして我等の已に同化せる思想なり」など、何度も福沢諭吉について書いています。

## 福田徳三との出会いで はからずも学者の道を歩むことに

1896年、高等商業学校に入学。実業家を目指しての選択でした。1902年の専攻部卒業までは、正金銀行か貿易会社に勤めたいと考えていました。実際に、亡父の門下生の一人が斡旋してくれていました。ところが、卒業論文である「外国貿易論」を、指導教授であった福田徳三が絶賛したことで、様相が変わってきます。

「考証該博、しかして紛糾せる学理を寸糸乱れず、明快流暢に論断し去りてほとんど遺憾なし。著者の造詣の深きは、その学理的思索の鋭きと相まってこの一篇をなす。独り卒業論文中の白眉たるのみならず、また我邦幾百の経済論文中まれに見る所」

まさに手放しの称賛と言えます。その後押しを得て、はからずも母校に残って教職に就き、学者としての道を歩むことになったのです。

「私は専攻部卒業（1902年）の後実業界に入る予定であったが、福田先生から勧められて学校に残ることにしました。

それから1年あまり、先生から手を取らぬばかりにして教えて頂きました。(略)私は元来学者などになる気は少しもなく、況や教師などは馬鹿のする職業ぐらいに考えていたので、福田先生から勧められて学校に残った当座は中々一生教師で暮らすつもりはなかったのですが、先生の学を好むこと熱烈であるのに引かされて、自分も多少勉強する気になりました」(『如水会報』/1930年6月)

学者として母校の教壇に立つ人間は、歴代何位といったずば抜けた成績を取った人物であることが普通です。ところが上田は、ごく平凡な成績でした。親友の前田卯之助は、のちに「お前が学者として偉くなるとは思わなかった」と言っているほどです。

1900年、高等商業学校(学部)を卒業した上田の同期生の多くは実業界に入り、貿易や海運などの分野で、各企業の中心人物として活躍しています。その前後20年間の一橋は、資本主義の上げ潮に棹さして、名実ともにキャプテンズ・オブ・インダストリーを輩出した時代だったのです。明治第二世代に属する人たちは立憲制度のもとで働くことを誇りとし、富国強兵をモットーとする帝国建設に疑問を差し挟むことはありませんでした。欧米に追いつき追い越せという使命感があったため、発展的な諸問題に取り組むことで他を顧みるとまがなかったのです。

## イギリス留学のフィールドワークで 実証研究に目覚める

上田は、1905年の日露戦争終了後に、「商事経理学」研究のために、イギリスおよびドイツに留学。アメリカを視察して1909年1月に帰国しました。

バーミンガム大学では、経済史家アシュレー教授(William J. Ashley)の教えを受けます。しかし、上田には教授が語学力不足を理由に、上田を冷遇しているように感じました。そこで、夏季休暇中の旅行から帰ると、マンチェスターに移り、同地の大学に籍を置いて勉学することにしたのです。

留学中の『日記』には、「学校は教育の唯一の方法にあらずして、唯沢山ある中の一つの方法たる事を知らぬ父兄はあわれならずや。旅行の為には学校の月謝と同じ費用を掛けて損はなし。学校を休ませて見物させるのが本当の教育なり」と書いています。実際に、上田は留学中にこの言葉を実践しているのです。夏休み中である7月18日～9月14日の59日間に、イギリスの18都市を訪問。工場31カ所、商業施設2カ所を見学し、経済問題についての会見を4回こなし、学校3カ所を訪問しています。世界の工場と言われた当時のイギリス産業界を直接見聞したわけで、のちの商工経営や産業革

命史の研究に大いに参考になったと推測されます。

1907年7月には、予定どおりイギリスを去ってドイツに渡りました。ドイツではボン大学で聴講、シューマッハ教授のゼミに参加します。そして、ボン農学校を見学したり、ゼミの見学旅行に同行しました。12月には、ライブチヒに三浦新七を訪ねて三浦の留学4年間の成果を聞き、議論をします。「同君は4年間の間に歴史、倫理、哲学等をしこみ、色々新説を聞かされたり。而して談論の際、同君の説が理論的且書物的なるに対し、余の考が実行的且旅行的なるを悟れり。同君の洋行は真の留学なり。余のは見物的なり。故に両方から意見をつき合わせてみれば利益も多き様なり」

三浦の留学成果を評価しつつも、自分の立ち位置を確認しています。

その後、ベルリン大学、ベルリン高等商業学校でも学び、パリを経由してアメリカに渡ります。

## わが国で初めて 「経営学」を講義する

上田は、留学まではわが国を一等国と考えていましたが、欧州の文物や制度の整然としているのを見聞して、富の程度でも、国民生活でも、彼我に格段の違いがあることを悟られました。しかし、だからといって悲観したわけではありません。「大和魂をもって従来の島国根性を打破して堂々たる人道を勇往邁進せんことを欲す」と述べています。

帰国後、母校で「商工経営」を講義します。これこそが、わが国の「経営学」の始まりです。これから1913年までの4年あまりの間に「商工経営」の基礎が固まり、『株式会社経済論』が刊行され、1937年に『経営経済学総論』として、集大成されたのです。

この1913年に、上田は旧藩主徳川侯嗣子の徳川頼貞氏の指導役を兼ねてイギリスに留学します。2回目の留学では、ウェッジ夫妻のゼミに通って、直接夫妻からイギリス風の社会民主主義について学びます。政治学への興味を、対話の形で取りまとめようとしています。『日記Ⅱ』によるとその項目は――

「Political Dialogue 考案

貴族政治と平民政治

自由放任と保護干渉

家族と国家

宗教及教育

外交及軍備

農業及工業

婦人と社会



社会組織と個人の徳性」

ちなみに、当時『エコノミック・ジャーナル』の編集をしていたケインズにも何度も会っています。

ところが、1914年に第一次世界大戦が勃発、校命により帰国しました。ちょうど第一次世界大戦によりドイツからイギリスに避難してきた小泉信三氏に徳川頼貞氏の指導役を引き継いでの帰国でした。

## 大学昇格時に 学制・学科編成に尽力 一橋大学伝統のゼミの礎をつくる

帰国当時の情勢は――。

第一次世界大戦により手薄になったアジア地域に日本は進出。対華21カ条要求をして満州の権益保護のため軍事的進出を強めています。経済面では、海運、造船、紡績などを中心とする戦争景気に乗じて産業革命を完成させるとともに財閥を中心とする独占が進展しました。国民は物価高騰による生活苦に悩み、1918年には米騒動が起きています。これにより時の寺内内閣が倒れ、原敬が初めての政党内閣を組織しました。原内閣は四大政綱の一つとして高等教育の拡大を謳っており、東京高等商業学校は1920年に東京商科大学となったのです。この間、上田は三浦新七、堀光亀とともに佐野校長を助けて、学制・学科編成の確立に尽くしました。

その特徴は、佐野善作『日本商業教育五十年史』に詳しく紹介されています。その第一は研究指導制（ゼミナール）であり、第二が学科目を必須と選択に分けたこと、特に選択科目が多く、学生の自由選択が認められたことです。ちなみに、東京帝国大学経済学部商業学科では、大部分が必修科目で占められており、ゼミナール制（演習を行う選択科目）は取っていません。このゼミナール制と自由選択の多い科目制は、現在でも一橋大学の特徴となっています。

## 学者たちが見た 上田貞次郎の学問的特徴

上田は東京商科大学教授として、英国産業革命史の講義に力をそそぎます。これは1923年に、『英国産業革命史論』とし



徳川頼貞氏とともに（1913年）。後列左より2人目上田貞次郎、前列左より2人目徳川頼貞、鎌田栄吉、小泉信三。  
写真：『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）からの転載

て刊行され、経済書としては珍しく、十数版を重ねました。

上田の学問的特徴について、三浦新七は次のように書いています。

「兎に角、此主体を中心とし、其行動を偽りなからしむる為には物事の真相を知る。Essentia（理論）に非ずして、物のExistensia（存在）を知る。Idealismus（理念）に非ずしてRealismus（実践）の学をする。System（体系）を作る為には非ずして、それが実際のKonstruktion（構造）に於て、何処から動力が出て、どういう経過で動くかという見地から学問したのであろう」（『一橋新聞』／1940年6月）

また、小泉信三は、「学風はプラグマチック、リアリスチックというふうな言葉が当てはまると思う。勿論研究は常に真実を掴むということが目的でなければならないが、上田氏にあっては、常に経世者の立場から物を見、また考えるというところが窺われた。即ち、知識を知識の為に求めるのではなく、経世の用をなすものとして之を探求するという態度が見えた」（『師・友・書籍 第2輯』）と語っています。

さらに、猪谷善一は、「一流の経済学者たるの要件は一身にして理論・政策・歴史に関する総合的独創的知識を所有することである。上田貞次郎先生はこの要件を備えた明治・大正・昭和を通じての数少ない経済学者の一人であった」（全集第3巻解説）と書いています。

上田の25年祭にあたって山中篤太郎が書いた評伝では、次のように上田を評しています。

「最後に特筆しなければならないのは、先生が『考える』学者であったことである。そしてこのことこそ、先生を日本の経済学の指導者の中で際だって特色づけるものであると私は考える。大正中期以降の先生の学問に明白に現れだしたよ



三浦新七（右）とともに（1936年）。  
写真：『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）からの転載

うに、『現実』の日本経済の中に立って社会経済的な『問題』をとり出し、これを『考える』ところに先生の研究が方向づけられている。この『現実的』『問題意識的』『考え方』は、日本資本主義の成長そのものが提出する問題を前にして、人間のための経済、人間からみて人間に帰る経済という社会観の動きの表現であり、その動きは、さきの自由人の社会への愛着、尊重をその底にひそめている」

当時の一流の学者の上田貞次郎評からも、その独創的で実証的な研究姿勢がよくわかります。

## 国際会議でも活躍 実業界に影響を与える

上田は、教授として講義を担当するかたわら、学外でも活躍しています。その時代特有の政治経済関係の諸事情に関わるようになってきたのです。その初めが、1919年のアメリカ・ワシントンで開催された第1回国際労働会議への政府代表顧問としての参加です。上田の専門は労働問題ではありませんが、政府代表の鎌田栄吉は郷党の先輩として上田の国際感覚と語学力を買ったようです。この会議の最大の眼目は、欧米ではすでに一般化されていた8時間労働でした。日本については9時間半（週57時間）案が採用されましたが、財界、国会の無理解で残念ながら容易に批准されませんでした。長時間労働と悪労働条件は第二次世界大戦前の期間を通じて、欧米諸国の日本攻撃の材料になってしまったのです。なお、上田はこの後も数回にわたってこの条約の批准を訴えました。

1926年4月、上田は『企業と社会』を発刊し、新自由主義を提唱しました。その論策は、経済問題を中心に政治、文化、教育に及びました。新自由主義は多くの知識階級の人々の賛同を得ましたが、当時流行しつつあった左翼社会主義側からは非難を浴びせられたのです。そんなこともあって、上田の

真意が十分に社会的に浸透しないまま、この雑誌は2年間で自ら終刊としました。

1927年には、国際経済会議に日本代表として出席しました。この会議の主催は国際連盟で、第一次世界大戦後の欧州を中心とした世界的経済不況の原因を探求して、商業、工業、農業の3部門にわたった救済策を立てることを目的としたものです。上田は志立鉄次郎首席代表とともに商業部に参加。関税の廃止または軽減を主張する会議案が、自分の従来の主張と一致したことに大きな自信を得たのです。この会議から帰国後、上田は志立たちと図って自由通商協会を設立しました。この協会は、平生夙三郎、村田省蔵たち関西実業家が主力として活動しましたが、軍部の大陸進出とともに国際的圧力を受けて逼塞状態に陥ってしまったのです。

この時代から、日本は緊迫する世界の政治経済動向を背景として、上田の見解とは逆行する傾向を強めていきます。1927年の日貨排斥運動、1929年の世界恐慌、1931年の満州事変、1932年の満州国建国、1933年国際連盟脱退……と国際的孤立の道を歩んでいったのです。



日本経営学会（1928年長崎高商）。前列2人目武藤長蔵、平井泰太郎、村本福松、上田貞次郎、木村重治、滝谷善一、原耕三、増地庸治郎、田崎仁義、中列左3人目田中金司、赤松要、園乾治、1人おいて山中篤太郎、竹中竜雄。

写真：『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）からの転載

## 新テーマ「人口問題」で 国際的な評価を得る

上田は1932年になって、研究テーマを日本の人口問題に絞ることで、新しい研究分野を開拓しました。1933年に発表された「近き将来における日本人口の予測」は、わが国の人口問題における画期的な論文だと評価されたのです。

その8月にカナダ・バンフで開催された第5回太平洋会議に臨んだ上田は、日本の立場を訴えました。

「わが国は人口8000万人を抱え、しかも若年労働人口が多く、これに職を与えなければならない。この要職業人口の扶養のためには輸出産業によるか、中国大陸への進出しかないのだが、われわれは前者の道を選びたいのだ」



ジュネーブ国際経済会議日本代表団（1927年）。

前列左より2人目佐藤尚武、上田貞次郎、志立鉄次郎、斯波忠三郎、加藤寛次。

写真：『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）からの転載



この日本国民の生存の基礎を訴えた現実的論議は、関係諸国に強い関心呼び起こし、日本の立場に賛同はできないまでも、理解を深めることにつながりました。さらに、各国でも報道されて、日本の人口問題は国際的反響を呼んだのです。

1936年の第6回太平洋会議（ヨセミテ会議）でも、上田は人口問題や通商問題を論じました。通商問題では、日本商品の進出に対する欧米諸国の非難であるソーシャル・ダンピング論に対して、日本の生活水準や輸出中小企業の存立理由などを説明して、これに心えています。

東京商科大学では、1935年に白票事件が起こりました。これにより佐野学長が辞任して、三浦新七が学長に就任しました。さらに、1936年には肅学事件が起こります。太平洋会議から帰国した上田は、三浦の後を継いで第3代東京商科大学の学長に就任しました。そして、1940年5月8日、在職中に病を得て死去しました。

## 経済学の各分野で活躍する弟子たち 実業界をリードするゼミ出身者

上田の研究は、経営学、経済史、政治思想史、国際経済学、経済政策、人口学……と多岐にわたっています。弟子としては、一橋大学教授、日本学士員会を歴任した上田辰之助や東京商科大学教授から実業家に転じた猪谷善一、会計学者の太田哲三など多彩で、各分野で活躍しています。

ゼミで直接指導を受けた学生は30年間に401名に及んでいます。商工経営学は実学ですから、学生の多くが実業家志望者だったのが特徴です。ゼミ出身者には、茂木啓三郎（キックマン第2代社長）、正田英三郎（元日清製粉社長）、森泰吉郎（森ビル創設者）、下村正次（元日本信託銀行社長）、小坂善太郎（元外務大臣）などの各氏がいます。

門下生に傑出した実業家が多いのには、上田の教えが影響しているからと考えられます。上田は、学長在任中に自ら「修身」という講義を担当し、あるとき「暖簾のれんに縋すがるべからず 暖簾を創るべし」と諭したといえます（1941年卒、金井多喜男氏）。「先輩が創りあげた暖簾に君達後輩が縋ってばかり居るとその暖簾はその重みに耐えかねてすりへり、果てはすり切れて仕舞う。須らく君達はこの暖簾を一層強力なものとするは勿論のこと、独自の進路を開拓してより立派な新しい暖簾を創りあげなければならない」と言って後進を育てました。この師にして、これらの弟子あり。師はキャプテンズ・オブ・インダストリーを育成しようとし、弟子はそれに応えたといえるでしょう。

これらの門下生は、1926年にゼミナール同門会「上田会」



家族とともに（1934年）。左より信三、勇五、良二、てい、貞次郎、正一。  
写真：『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）からの転載

をつくりました。上田会有志は、上田の在職25年を記念して1931年に書斎建築費を贈りました。その額が多かったので、上田は「この金は書斎だけでは立派過ぎるから、住宅を作らしてもらった。今後はこれを根拠として研究と育成に励む所存である」として、感謝状を贈ったのです。師としていかに慕われていたかがよくわかります。

※本章は、『上田貞次郎伝』（1980年 上田正一／著 泰文館／刊）をベースにまとめてものです。

### 【上田貞次郎年譜】 Teijiro Ueda (1879～1940年)

- 1879年（明治12年） 東京府麻布に生まれる（5月12日）。
- 1902年（明治35年） 東京高等商業学校（現一橋大学）専攻部貿易科卒、在学中は、福田徳三に師事。東京高等商業学校嘱託講師。
- 1905年（明治38年） 同教授。
- 1905年（明治38年）～1909年（明治42年） イギリス、ドイツ等に留学し、アシュレーやシューマッハのもとで学ぶ。
- 1913年（大正2年） イギリスへ留学。ウェップ夫妻のもとで学ぶ。
- 1918年（大正7年） 商学会を設立し同幹事に就任。
- 1919年（大正8年） 第1回国際労働会議（現国際労働機関）に政府代表顧問として参加。
- 1927年（昭和2年） 国際経済会議に日本代表として参加。
- 1928年（昭和3年） 志立鉄次郎や平生鈞三郎とともに自由通商協会を設立。
- 1933年（昭和8年） 人口問題研究会理事に就任。
- 1933年（昭和8年）及び1936年（昭和11年） 太平洋会議の日本代表等も歴任。
- 1936年（昭和11年） 三浦新七の後任として、東京商科大学（現一橋大学）学長に就任。
- 1940年（昭和15年） 東亜経済研究所（現一橋大学経済研究所）を設立し、初代所長に就任。国立人口問題研究所（現国立社会保障・人口問題研究所）参与。学長在任中に盲腸炎で急逝（5月8日）。在学生の寄付により、東京商科大学国立キャンパスに胸像が建てられた。



上田正一氏

『上田貞次郎伝』の著者であり、貞次郎博士のご長男である上田正一氏。正一氏は、東京商科大学生時代リベラルな思想に傾倒し、軍国主義に染まる社会背景の中、放校を余儀なくされる。当時、貞次郎博士は商科大学内有数の教授でありながら、正一氏を咎めるわけでも、また擁護するわけでもなかった。博士は、自由主義の人であった。

※文中敬称略。※引用文中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記へと改めました。

各界でユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？  
第24回は、エコノミストであり、同志社大学大学院教授も務める浜 矩子さんです。

聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

## 経済学の女海賊

### 信じる道へ、迷いなき選択

**山下** 今日先生の元気の秘密をお伺いしたくて、楽しみにしていました。興味津々なことがたくさんあるのですが、まずはじめに、H Qの読者に独占でお聞かせいただきたいと思います。お洋服はどこでお求めになっているのですか？

**浜** いい質問ですね(笑)。基本的には2軒、地元にあるブティックです。特に注文は出しませんが、これは買うだろうとめいっぱい派手なものを用意してくれています。目立ちたがりで自己顕示欲が強いパフォーマンス志向なので、他の人は絶対にしないだろうという着こなしが好き。小さい頃からお芝居や踊り



が大好きで、舞台に立ちたい気持ちがありますので、そんな趣味が服装にも影響しているようです。

**山下** その先生が、なぜ一橋の経済学部になられたのですか？例えば東京大学の文学部や早稲田大学の演劇科(現：文学部演劇映像コース)という選択もあったのではと思いますが。

**浜** とても具体的な出発点があります。イギリスでポンドの切り下げがあった中学2年の時です。その話題を取り上げた社会科の先生から通貨の切り下げ・切り上げのごく簡単な説明を聞いて、いったいなんのこっちゃ？というミステリーが瞬く間に謎解きされたようでワクワクしました。私は親の仕事の関係で中学1年の1学期まで4年半ほどイギリスに住んでいました。強く関心を持ち続けていた国のことだったので、よりビビッドにイメージが入ってきたのだと思います。

**山下** 先生は、イギリスのカッコイイ時代を体験されていたのですか。

**浜** 当時は日本人も本当に少なくて、イギリスの生活にどっぷり浸かっていました。そこに突然、帰国子女などという言葉も誰も知らなかった時代に日本の中学校に落下傘降下、ものすごく違和感のある世界という感じでした(笑)。帰ってきて1年後に起きた出来事をきっかけに、経済にこんな謎解きの面白さがあるならば、その全貌をマスターしたいと。その発想はずっと持ち続け、大学受験という段階になった時点でも、経済をまともに勉強できるという視点から一橋を選んだのです。

**山下** 経済なら一橋と思われた、その理由はどのあたりにあるのですか？

**浜** 社会科学らしい、今の言い方ですとりベラル・アーツらしい

### 浜 矩子 (はま・のりこ)

エコノミスト、同志社大学大学院ビジネス研究科教授

東京都出身。1975年一橋大学経済学部卒業。三菱総合研究所に入社し、ロンドン駐在員事務所所長、同研究所の主席研究員を経て、2002年より現職。専門は国際経済学、国際金融論、欧州経済論。国内外のメディアに多数登場し、主にマクロ経済問題に関するコメンテーター・執筆者として活躍。金融審議会、国税審査会、産業構造審議会貿易経済協力分科会特殊貿易措置小委員会等委員、経済産業省独立行政法人評価委員会委員、内閣府PF推進委員会、社団法人共同通信社「報道と読者」委員会、Blekinge Institute of Technology Advisory Boardメンバーなどを歴任。近著、『ザ・シティ 金融大冒険物語 海賊バンキングとジェントルマン資本主義』(毎日新聞社)。



生きた経済を考えるのは一橋だろうと。東大は総合大学ですから、経済学部はいろいろな学部があるなかの一つ。それに対して一橋は、“社会科学の総合大学”と銘打っている。そこがすごく面白いし、なかでも経済が目玉だろうと思っていましたから。

**山下** リベラル・アーツ的な経済学というのは、今だと“総合大学でカフェテリア式にいろいろなものがある”的な考え方になってしまうと思いますが、先生の場合は経済学の学問自体にある社会科学の匂いというものに対する想いだったのでしょうか。

**浜** そこがドラマであり、謎解きであり、人の営みであるというところ。今は、経済活動は人の営みであり、経済活動を行う生き物は人しかいないと、つくづく実感しています。当時は、そのような形で整理して考えていたわけではありませんが、お芝居好きで、ドラマ好きで、ミステリー好きで、物語好きであれば、そういう要素が入らないとつまらない。そうであり、かつ非常に論理性も求められる。間に飛躍のない論理の鎖をつなげていってな

“風が吹くと桶屋がもうかる”かが理路整然と説明できる。そこには謎解きの要素もあるし、理詰めでものを考える面白さがある。ありとあらゆる面白さが詰まっているエリアだと思うのです。

**山下** すでに学部生の時から、思っていたところがすごいです。

**浜** もちろん入ってみると、なかなか人間が見えない世界です。でもそこに人が見えると、私は思っていました。七面倒な生産関数だの、図に描けないものは経済ではないというようなことを近代経済の先生たちは教えていて、それも一生懸命に勉強しましたが、こんなはずじゃなかったと思ったことはなかった。そういう形で人間の営みを説明しようとするプロセス自体が、それなりに面白く感じていました。

## 人間のドラマとして経済を捉える

**山下** 先生の最新の御著書でも、歴史の人物が今に生きる人物像のようにくっきりと描かれています。例えばマーチャント・バンカーやジョバーたちがええ所のおぼちゃんとか成り上がりといったキャラクターを持っている。今の現実のビビッドな把握、理論の体系的な理解、そして、歴史への深い洞察という3つのレイヤーをここまで分かっている方だからこそこんな風に世界観を提示できるのだと感じました。リカードが成り上がりジョバー



山下裕子 (やました・ゆうこ)  
商学研究科准教授

だったと思うと理論把握も変わる気がします。

**浜** 言ってみれば、どこまで人間のドラマとして経済活動を捉えられるかが勝負。マーチャント・バンカーもジョバーも、ロボットや機械ではない。人間たちのせめぎ合いとひしめき合いが、金融の世界にドラマを生んでいる。“どこにドラマがある？”“どこに人間がいる？”と突き止めるのが、経済学の仕事なのではないかと思うのです。

**山下** こうした人物像はどんな時にリアルに浮かんでくるのですか。

**浜** いろいろなものを読んで、その人の発言に触れてみる。学者たちの歴史に残る言葉を見ると、“この人は毒舌”とか、“ピュアな人”というように、雰囲気が見えてきます。

**山下** 先生は海賊がお好きですね。海賊のようないい男たちがいないのかという叫びにも読めてしまいました(笑)。オックスブリッジのエリートたちは世界に果敢に繰り出していただけじゃなくて、猛烈に本も読みますね。海賊魂が知的な領域でも大いに発揮されている。英語という言語がここまで世界に普及したのは、たんに植民地支配といった問題ではなく、言語の大海に乗り出す精神の結果という側面もあるように思います。言葉で支配するという海賊の血が流れるような舞台回しに日本の布陣は食い込めない。がんばってきた日本の女性なら、まだ舞台回しの隅っこに加わるのでしょうか……。

**浜** 経済学の世界で、貿易財と非貿易財という財の区分があります。非貿易財の特徴は3つあって“動かしにくい・環境適応力が低い・壊れやすい”。これは日本男性の3大特徴でもあるのかなと。

**山下** どこにでも行ってやっていける海賊とは正反対じゃないですか。

**浜** それに対して日本の女性は、非常に機動的で、環境適応力があり、格別にタフ。ありとあらゆるところにいて、現地で力強く生きている人が多いです。残念ながら日本男性にはそういう面が見えない。これは男女固有の特徴というよりは、歴史的、社会的な条件付けなのでしょう。日本の男性はじっとしていれば周りで女性がセッティングしてくれるのでだんだんボーッと





なっちゃって、かたやレディーファーストの欧米では周りで男性が気配りをしてくれるため女性がヤワになっていく。徳川300年の時代から家計は奥さんがしっかりと握り、面倒なこと一切を仕切っている。日本にも昔は倭寇がいて海賊文化があったのにどんどん箱庭的

になり、戦後はまた別の意味でこのようになってしまった。こういった歴史的、社会的条件付けから、いかに我々自身を解放していくかということなのかなと思います。

**山下** 1971年の通貨ショック・85年のプラザ合意を経て、貿易財はどんどんグローバル化していきましたが、非貿易財は徹底的に非貿易財になりましたね。

**浜** そのプロセスで、終身雇用、年功序列、護送船団、すみ分け、ぬるま湯と、どんどん言葉が生まれていった。離陸間もない日本経済が力をつけたので、その時代状況には適した形態ではあった。しかしあまりに上手く行き過ぎてしまったため、それがかつての古い知恵となった時に脱却できない。そのまま失われた10年に突入し、突然グローバル化の波に乗らざるを得ず、それで今度はリーマン・ショック。落ちていて時代を受け止める新しい知恵を作り出す間もなく、日本人たちはきりきり舞い。男性社会と女性社会は表裏一体ですから、役割認識などをじっくり考えることができぬまま動き回されているところがあるでしょう。

### 足並みを揃えない勇気

**山下** 先生はオイルショックや通貨危機の時期に多感な大学生時代を送られていますね。当時の男子たちはどんな印象でしたか？

**浜** 経済学部は約200人、女子は3人だったので、すごく嫌がられるポジションでした（笑）。私は高校も女子が少なかったので、

特に男子がどうだという意識はなかったですね。

**山下** そのなかで先生は、授業に出ていてもぶっちぎりでしたか？

**浜** 基本的にそうですね。誰よりも先に喋りたいというところは、今でもなおらない（笑）。女子は事実上一人ひとりでしたから、おのずから個性が出てきたのでしょうか。

**山下** 純粹に経済学を学びたいという想いが入口だったということでしたが、大学に行ってから先の心配事はなかったですか。

**浜** 非常に厳しい環境であろうとは十分に認識していましたが、大学生としてそれが心配であるがゆえに勉強する機会をなおざりにしてしまうことは念頭にはなかったですね。

**山下** 一般的に偏差値を導入した後の世代は、偏差値で学校を選んでその先は真剣に考えていない傾向があります。でも本来は何を学びたくて、その先で何がやりたいかが大切ですね。

**浜** おっしゃるとおり、自分が何を謎解きしたいのかが出発点。自然科学の世界でも、社会科学の世界でも、そこでどれだけのことを会得するか、考えるかが勝負であって、このプロセスを通らずにキャリアがどうという発想は、本当は成り立たないはずなのです。

**山下** 今の学生たちには、そういった勝負にかける精神が乏しいと感じる時があります。今日も授業で英語のDVDを見せたら「日本語じゃないとわからない」と言われてがっかりしました。



**浜** それは大問題です。知的怠惰は無知を生み、無知は恐怖を生み、恐怖は暴力を生む。知って見たら何てことはないことが、知らないがゆえに怖くてしょうがない。大きく言えば、そういうところが越えていくことが教育だという気がします。

### 対談を終えて 海賊紳士のミューズ

対談の後、ザルツブルグで開催された国際会議に出席した。「印中の対立とグローバルな責任」というテーマで、アジアの通貨統合から、さらには海賊問題まで、話題が満載。海賊が海賊を論じるの様相を呈する。浜先生だったら、あちこちで論戦をはれるんだろうな、などと思いつながりのディナーの席で、ご一緒していたイギリス人の経済ジャーナリストが言うではありませんか。

「すごく昔のことですが、忘れられない日本の女性がいましてね、本当にチャーミングな人で、確かインシヤルはH……。イギリスで教育を受けて、英語が完璧……。もしかして、そ、それは、われらが、浜先生？「そうそう、Noriko Hama! ほんと、規格外の魅

力の持ち主です。」彼の眼がキラキラと輝いたのを私は見逃さなかった。浜先生は、間違いなくグローバル・モテ女である。

クール・ブリタニアが、愛国歌「ルール・ブリタニア!」の振りであることはよく知られている。ブリタニアは、ローマ時代、もともとはラテン語でブリテン諸島を意味したのだが、16世紀に、ブリタニアという女神の名前として、リバイバルしたのである。スペインの無敵艦隊を破って世界を震撼させたエリザベス1世のイメージが重なったものと言われる。

エリザベス1世にスペインの無敵艦隊といえば、浜先生の愛してやまない元祖海賊紳士、フランシス・ド

レイクだ。国家の形成時に、海賊と、女神が同時に出現するのが面白い。強い女のトンデモナイ命令ほど、トテツモナイ海賊魂を刺激する。女神の命とあれば、命を賭けた冒険に出かけてしまえるところが騎士道精神の発展形だったのかもしれない。

フランシス・ドレイクの祈りの言葉がある。

「主よ、我等に苦難を与えたまえ。

我等があまりにも安寧に入港したときに。

なぜなら、我等があまりにも近くのを航海しすぎたということなのだから。」

海賊紳士たちを挑発し鼓舞し続ける浜先生は、女海賊ではなく、女神なのではないから。（山下裕子）



個性は主張する

# One and Only One

第 25 話

隠岐の民宿「但馬屋」勤務

宮崎雅也氏



M a s a y a  
M i y a z a k i



隠岐諸島西ノ島、  
別府の港に停泊していた  
大きなフェリーの先に、  
小さな釣り船が泊まっている。  
その操舵室から  
顔を出して手を振っているのが、  
出迎えに来てくれた  
宮崎雅也さんである。  
宮崎さんは、中ノ島海士町あまにある  
民宿但馬屋で働いている。  
だからといって、  
隠岐出身というわけでも、  
実家が民宿だったわけでも、  
ホテル経営を学んでいたわけでもない。  
海士町あまの中学生との不思議な因縁が  
彼を隠岐に引きつけたのである。



前日に網をしかけ、じっちゃん  
とともに翌朝早く網を上げに  
向かう。冬場は、食べ切れない  
ほどの大量の魚がかかること  
もある。魚は、自分たちで食べ  
る分と民宿に来るお客さんに  
出す分しか捕らない。



一橋大学から隠岐まで  
赤い絨毯が敷かれていた。  
島で自然とともに暮らすのは  
必然の選択だった。



## それは中学生の出張授業がキッカケだった

2005年6月、隠岐諸島の中ノ島<sup>あま</sup>海士町に一つある中学校から、2年生が一橋大学に出張授業に訪れた。これは修学旅行の一環で、国立市と海士町との間に以前から交流があったことから持ち上がった企画だった。しかし、その実現までには紆余曲折があった。

中学生が海士町の歴史などの出張授業をしたいと、海士町の職員から、島根県の産業振興に関するブレーンをしていたゼミの関満博先生に相談があったのです。関先生は、私たちゼミ生に向けて、「中学生に『夢』と『希望』を与えてほしい」と呼びかけました。こうして、関ゼミが中心になって中学生の出張授業を受け入れることになったのです。中学生たちの発表は、島に対する誇りが伝わってくる素晴らしいものでした。何よりも、純粋で素直な中学生たちの一生懸命さに感心しました。

その夜、引率してきた町役場の職員とゼミ生が懇談会を行いました。どんどん話が盛り上がり、「海士町に遊びに行きます！」と約束してしまったのです。その年の8月にゼミの夏合宿で富山に行ったのですが、その約束が頭にあったこともあって、合宿終了後にゼミ生7～8名で海士町を訪れました。

## ナマコが縁でじっちゃんとお会う

実はこの段階では、ゼミでの交流をきっかけに漠然とした関心が湧いた程度だった。しかし、町役場の職員に町を案内してもらっているうちに、宮崎さんは次第にその魅力に惹かれるようになってきた。そのキーワードは、「ナマコ」だった。

国立で話したときに町の職員は、「海士町の産業の可能性は古くは外貨獲得につながる商品であった干しナマコにある。産業として復活させたい」と強調していました。実は、大学3年から



2年間休学して、中国の深圳<sup>シンセン</sup>にある製造業の現場で働いていたことがありました（これも関先生からの紹介です）。そのときに干しナマコが珍重されていることを知り、ビジネスとしての可能性を感じました。そこで、海士町を訪問したときに、ナマコの加工現場を見せていただくことにしたのです。連れて行ってくれたのが、但馬屋。ここでじっちゃん（宇野茂美さん）、ばっちゃん（宇野千枝子さん）と出会っていろいろな話を聞かせてもらいました。普段はお米作りや畑の耕作、漁、渡船、民宿、畳屋を営み、ナマコの加工は仕事の少なくなる冬場の収入源となっていることなど。話を聞いているうちに、海のことや山のことなど、いろいろ勉強したくなってきました。自分は直感で動く人間ですから、思わず「ここで勉強させてください」とじっちゃんにお願いしました。じっちゃんは、あまり本気にはしていないようでしたが、「いいよ」と答えてくれました。

## 母の猛反対は押し切ったが……

父親は建築士、母親は看護師。当然のことながら、両親にとっては息子が見も知らない民宿で働くことについて賛成できるはずがない。一方の但馬屋側でも、国立大学出身者を受け入れることに違和感がある。一悶着が起こったのは当然の展開だった。



一橋大学への入学動機は、単に「世の中のお金の流れに興味があった」という程度のおぼろげなものでした。高校の先生との三者面談で母は、「一橋という大学に行きたいって言っているが、大丈夫なんですかね？」と聞いていました。問いに対して先生は、「一橋大学に入れたら、将来に向けて赤い絨毯が敷かれたようなものだ」と答えていました。それを聞いた母は、「なら、がんばって一橋に行け！」と応援してくれたのです。

その母は、「島にやるために大学に行かせたんじゃない」と猛反対でした。2年間休学して中国に行ったときは、賛成してくれた母でしたが、就職となるとまた違ったのです。「それでも、島には学びたいことがある」と押し切りました。

その勢いで但馬屋に電話を入れると、今度は但馬屋の方で問題が生じました。但馬屋のスタッフは、じっちゃん一人が男性で、残りは女性ばかり。その女性陣が、「有名大学を出ている人を受け入れても、教えることなんかあるのか？そもそも本気なのか？」と猛反対だったのです。それでも、「大学で学べないこと



を学びたいのだ」と、押しかけ就職をしてしまいました。その過程では、国立に中学生を引率してきた役場の課長はじめ3名の職員が、揃って説得にあたってくれました。「ヤツは本気らしいぞ」とプッシュしてくれたのです。

## 退路を断って自然との共生を決意

とはいえ、島で生活することは容易ではない。そこでいろいろ相談すると、町役場からは仕事面でのサポートもありそうだったし、県の定住財団から補助をもらえることもできそうだった。

じっちゃんに、役場の仕事がありそうだと言うと、「受け入れる以上は親御さんへの責任があるので、しっかりとしたことを教える。中途半端な気持ちではなく、それなりの覚悟をもって臨ん



でほしい」と諭されました。そこで、余計なことを考えずに但馬屋だけを考えて仕事に取り組みようと決意しました。

それから3年経って——。田舎暮らしというのんびりしたイメージがありますが、実際にはそんなものは皆無です。民宿や釣り船では、お客さんの対応ばかりでなく、天気とも上手に付き合わなければなりません。風が出たり雨が降ったりすれば、お客さんを磯までお迎えに行く。雲の流れを読みながら、一日の仕事の流れを決めていきます。これには相当の段取り力が必要になります。確実にいえるのは、経験が深まるにつれて、わかってきたこと、できることが増えてきたということです。もともと自然と親しむことが好きでしたが、島で暮らしているうちに少しずつ自然との付き合いがうまくなっているように感じます。お米や野菜、魚など自然のなかから得たものを喜んでいただく生活で、お金では買えないものをたくさん手に入れています。まさに、自分にとって必要なことをやっているという実感があるんです。これがうれしいですね。

## 自然体で町おこしのモデルを目指す

まだまだ休業中の宮崎さんが、着実に海士町に根を張りつつある。じっちゃんこと宇野茂美さんのやってきたこと、宮崎さんが海士町で今行っていることは、過疎化が進む多くの市町村にとって、町おこしの一つのよいモデルになりそうである。

じっちゃんは、家も田んぼも船もないところから、一代でここまで築いてきました。これは凄いことです。まず、畳屋からスタートして、船を持った。船が空いているとそこに釣り客から声がか

かり、磯までの渡し船を出すようになった。次第に船が大きくなると、今度は泊まりたいというお客さんが出てきて民宿を始めた。民宿のお客さんに喜んでもらうために美味しいお米を作り、新鮮な野菜を作るなど、自家製品を提供するようになった……自然を受け入れ、技術を身に付け、お客さんのニーズに応えながら、ゼロから築いてきた世界ですから、「たとえすべてを失っても、もう一度やり直せる」とじっちゃんは言います。よほどの自信がないと言えない言葉です。私もそんな生きる力を身に付けたいと思っています。

現在の日本では、高齢化が進んで土地を耕す人が少なくなっているという現実があります。ばっちゃんはあるとき、「土地を耕さない国は滅びると中国の偉い人が言っていた」と危機感を示していました。

但馬屋では、畑を耕し、田んぼでお米を作り、魚を捕って生活しています。大変ですが、日々の喜びがあります。しかも、それで生計が成り立っているのです。そのことを、自分たちが存在することで示すことができます。自分たちのやっていることを発信するだけで、土地を耕そうという人、海で稼ごうという人、それらを組み合わせて生計を立てようという人が増えていけばうれしいですね。そんなモデルになりたいと考えています。

農業には食糧の確保、国土保全、文化の継承といった多くの価値がありますが、それを始めるのには農地や農具などの資金が必要になります。新しく来た人が簡単に始められるものではないという現実もあります。その意味では、私の場合は「いいとこどり」で勉強をさせてもらっているといえます。それでもじっちゃんは、「あと数家族なら但馬屋に受け入れられそうだ」と言います。

## 魅力あるモデルとしての完成度を高める

自然とともに生きるモデルとなるために、宮崎さんは船の操縦も覚え、民宿但馬屋名物の踊りの伴奏をする三味線も覚えた、田んぼや畑の作業も同様である。もっとも、畳作りについては、学生時代に小平キャンパスそばの畳屋でアルバイトをした経



宿泊客に島の民謡と踊りのサービス。三味線はここに来てから練習した。歌は女将さん、踊りは女将さんのお嬢さんが担当する。

験が生かされていると言うが……。現在では、魅力あるモデルとしての完成度をさらに高めるべく努力を重ねている。

●  
但馬屋が取り組んでいる農業はまだまだ拡大の余地があります。今、新たに土地を求めて、小麦、ソバ、小豆、大豆を作り始めています。だんだん釣り客は減っています。民宿として新しいお客さん呼び込む魅力づくりの一環として、お米ばかりでなく



味噌作りもするなど、さらに自給自足を高めていきたいと考えているのです。なお、海士町に来るキッカケとなった干しナマコ作りでは、2007年に加工販売会社である株式会社たじまやを立ち上げて、私がその代表を務めています。海士町の資源を生かす方策の一つですが、島の漁師さんの所得向上や地元の雇用創出にも貢献できればいいと思います。また、若い人が海で生計を立てられる環境づくりにつながればと考えています。海士町でできることは、他所のモデルにもなることだからです。

振り返ってみれば、ゼミをはじめ一橋大学で学んだことが、ここで生きています。一橋大学は私にとって、ここに来るためにあったようなもので、やはり赤い絨毯が島まで敷かれていたのでしょうか。

### 機会を捉えて島の魅力を発信する

●  
海士町で働く宮崎さんをゼミの後輩たちも応援してくれている。新聞、雑誌も取材に来る。宮崎さんは、機会を捉えて島での生活の魅力を発信し続けている。

●  
たまにゼミの後輩たちが遊びに来てくれます。2、3日から長いときは1カ月ぐらい農作業やナマコ加工作業を手伝ってくれることもあります。これも離島ならではのことで、その意味でも隠岐に来てよかったと思います。島の魅力に惹かれて島を訪れる方々からもいろいろなことを教えていただいています。情報が居ながらにして集まってきます。

島には、第一次産業ばかりでなく、第二次産業、第三次産業と仕事は何でもあります。小さな島ですから、いろいろ機能分担しなければなりませんし、マルチでなければなりません。但馬屋はもともと畳屋としてスタートして、マルチ化してきました。島に

但馬屋で働く人々。左から／日中手伝いに来る近所の下田律子さん、宮崎さん、じっちゃん、米国サンフランシスコからWWOOFという国際交流プログラムを利用して農業・漁業を体験中のマークスさん、ぼっちゃん、女将の宇野貴恵さん。

ある智慧は、どんどん活用しなければなりません。

今後さらに自給レベルを上げていけば、民宿の集客力に結びついてくるでしょう。それを泊まってくれたお客さんがブログなどで紹介してくれたり、新聞、雑誌が取材に来てくれたり……自然に発信力に繋がってくるでしょう。

### 猛反対した両親も島の魅力に納得

●  
ところで、猛反対したご両親は、今はどう考えているのだろうか。気になるところである。

●  
ははは。大丈夫ですよ。父は海士町に2回来てくれましたし、母も1回来てくれました。「山あり海ありで楽しくやっているんだから、いいんじゃないか」というのが、両親の感想です。島に来て、じっちゃんやぼっちゃん、島の人と触れ合うと、そのよさをわかってもらえます。父はじっちゃんと一緒に船底のペンキ塗りをするほど、馴染んでいましたよ。「年に何カ月かこっちで野菜作りなんかやったら？」と両親には提案しています。多少は心を動かされているようですね。

#### ◆宮崎雅也（みやざき・まさや）

群馬県出身。2006年一橋大学商学部卒業、民宿「但馬屋」勤務。関博博ゼミで地域産業振興に関心を持つ。大学3年時から2年間休学し、勉強のため中国・深圳の製造業の現場で勤務。





# 「ねずの木の話」

## 本当は怖いグリム童話

「本当は怖いグリム童話」に関する考察が出版されたのはかなり昔だが、この「怖い」は魔女や巨人や竜のことではない。怖い怪物は童話につきもので、主人公が努力苦勞して、時には魔法のような不思議な力を借りて、恐ろしい怪物や悪者を倒し幸せになるのが童話のお約束というイメージがあった。でもグリム童話はそうではありませんというのが、こうした書物の主張だった。お話の中の男の子や女の子がかならずしも逆境を克服するわけではなく、不幸になったり死んでしまう話も数多く含まれている。さらに、たとえ主人公が幸せになっても、彼らをいじめた者たちが、なんとも残酷な仕返しをうける。「灰かぶり」(シンデレラ)に意地悪した姉妹は、鳩に眼をえぐられ目が見えなくなるし、白雪姫の継母は真っ赤に焼けた靴をはかされ、死ぬまで踊り続けなければならなかった。悪いことをした者たちが、あやまって仲直りをして、皆で楽しく暮らしましたという「子供向け」の結末にはならない。「グリム童話」の訳が定着し、言い習わされているが、かならずしも子供のための話ではない。原語はグリム・メルヘンだが、メルヘンというのは、昔から伝えられた短い話という意味で、昔話とも民話とも言えるとの解説だった。ただし子供のための話でないから残酷で怖いという意味ではない。そもそも昔からの子供向けの話や歌には、マザー・グースをみてもわかるとおり、かなりリアルに残酷な描写が多い。

## 「ねずの木の話」

まことグリム・メルヘンには、善い人が報われて幸福な暮らしが約束される予定調和に収まりきらない筋書きが多い。また大筋としてはこの常道を踏まえていても、結末にいたる経過がすんなり受け入れにくい不思議な話がある。47話「ねずの木の話」もそのひとつと言えよう。「むかしむかし、2千年前」子供をほしがっていた夫婦の妻が、ねずの木の下のリングゴの皮をむき指を切った血が雪の上に落ちたのを見て「血のように赤く、雪のように白い子供」が欲しいと願った。ねずの実が実るころ、望み通りの男の子が生まれるが妻は死んでしまう。2度目の妻には娘が生まれ、男の子が憎くてたまらない。継母はこの子がリングゴの箱に頭をつっこんだとき、重い蓋を閉めて殺してしまふ。「子供

の頭は、赤いリングゴの中に落ちました。」死体は切り刻んでスープに入れられ、妹のマルレーンが泣きながらかきまぜる。「涙がお鍋に落ちたので、塩を入れる必要がありませんでした。」帰宅した父親は息子の死を知らず、おいしいおいしいとスープを一人で全部食べてしまふ。妹が兄の骨を拾って、ねずの木の根本に置くと霧が出てきて小鳥が飛び出す。小鳥が歌うのは「母さんが僕を殺し、父さんが僕を食べた。妹のマルレーンちゃんが僕の骨を残らず探し、絹に包んで、ねずの木の下のにおいた。クイット、クイット、僕はなんてきれいな鳥だろう。」この歌には魔的魅惑があり、歌を聴きたがった者たちは金鎖や赤い靴や石臼を小鳥に与える。金鎖を父に赤い靴を妹に贈り、石臼を継母の頭に落としてつぶすと、煙が立ち上り男の子は生き返る。父と妹と子供は「そこで三人一緒に楽しく家にもどり、食卓に座って食事をしました」。

## 不思議満載

真っ白な雪に散った真っ赤な血を見て、子供の誕生を願うのは「白雪姫」と同じでなかなかメルヘンティック、そして継母の継子いじめもおなじみなのだ。が、そのあとの話の展開にはびっくりさせられる。妹はなぜ父親に兄の死を告げないのだろうか。父にとってスープがびっくりするほど美味なのはなぜだろう。がつがつ食べたのに金鎖を贈られるのも不思議。小鳥の歌の怖い魅惑の由来は何だろう。それに、継母が「悪魔にそのかされて」子供を殺した後で後悔して恐れる脇筋は、どういう意味を持つのだろうか。疑問はいくらでも湧いて尽きないが、それに対して民話学、民俗学、心理学などの研究が、それなりに説得的な解釈を提供してくれている。親子兄妹関係コンプレックス、鳥の霊魂信仰、植物呪術習俗、民話伝承のモチーフ類型などである。しかし、子供でなくともこの話を初めて聞く者が惹かれるのは、銀色がかかった常緑樹ねずの木の下の雪と鮮血、赤いリングゴと生首、白い骨と絹の布、霧の中の炎から飛び出す小鳥、クイット、クイットという鳴き声、黄金の鎖と赤い靴と石臼を運んで飛ぶ鳥の姿、といった鮮烈な光景ではないだろうか。色彩や形象の驚くような組み合わせのみならず、登場人物の矛盾に満ちた理不尽とも言える振る舞いも戦慄をよぶ。「シニールな話ですね」との感想を聞いたことがあるが、超現実的で理屈付けを拒否するかのような構造がこのメルヘンの魅力となり、ながく語り継がれてきたのではないだろうか。

Book Review



言語社会研究科教授

古澤ゆう子

# ベルンハルト・シュリンク『朗読者』

裁判員制度開始を睨み、受講生のリテラシー増進を目的とした教養ゼミが開講されている。世間では制度的理解は進んでいるようであるが、裁判員に不可欠な高度リテラシーの養成が遅れているのではないか。行間に隠蔽された真偽を析出できる裁判員が不足しては、制度の存続も危ぶまれるだろう。読むことが苦手な学生の増加を目の当たりにし、英文学専門の評者が教科書に選んだのは、ドイツの公法学者シュリンクの小説である。

## 「裁判員制度の時代に読む小説」

戦後ドイツを舞台とした本書では、親世代の戦争責任を断罪する世代に属する法史学者ミヒャエルが、元ナチとは知らずに愛してしまった年上の女性との関係を自ら回想する。スイスで公刊以来、欧米でベストセラーとなり、高校・大学の教材としても活用されている。国境を越えた受容を願う著者の希望により、英語の脚本で映画化され、日本では『愛を読むひと』の題で昨年公開された（DVDリリース二〇一〇年一月の予定）。

英国でその予告編を見て原作が良い教材になるだろうと直感したが、映画が日本でどれほど受け入れられるかは疑問に思った。出会った当初15歳のミヒャエルと36歳のハンナが結んだ関係には背徳のイメージが色濃く、日本人好みのロマンスではない。しかも失踪した彼女と法学生になった彼女が再会するのは、彼女が元収容所看守として裁かれる戦争裁判という展開となると敬遠されそうである。しかし、英語圏というフィルターを通した映像化と、ハンナ役英国女優のアカデミー賞受賞の相乗効果で、日本でも「メジャー映



『朗読者』ベルンハルト・シュリンク／著 松永美穂／訳 新潮社刊  
定価：1,890円（税込）2000年4月26日発行

## 「真実の物語」

本書の評価は概ね肯定的だが、厳しい批判もある。たとえば、「児童虐待」を美化しているという批判。また、社会的弱者のハンナが「文盲」であることを隠すため己が犯した以上の罪状を自白し無期懲役となる展開と、彼女を愛したことに罪悪感を覚えるミヒャエルの「自己憐憫」的な語りから、ナチスの非道を軽減するメロドラマになっているという批判もある。

二人の抱える欺瞞や心の闇を解消するまでの効果はあがっていない。服役中読み書きを学んでホロコースト関連の書物を「読み始め」、己の罪を悟り始めたハンナが選ぶのは、恩赦と自殺である。また、ミヒャエルが述懐するように、彼に対する彼女の愛については、「何もわからない」。

彼女との思い出を紡ぐミヒャエルの語りにも欺瞞が皆無という訳ではない。曰く、「ここに書いたパージョンが正しいという保証は、ほくがそれを書き、他のストーリーは書かなかったという事実にある。書かれたパージョンは書かれることを欲しており、他の多くのパージョンはそうではなかったのだ。しかし、彼のいう「真実の物語」とは彼の視点から描かれ、ハンナの内面は間接的にしか語られない。それを「ハンナとぼくの物語」の「正しいパージョン」と呼ぶのは語弊があるだろう。また、物語の決定版は、「書かれることを欲し」た物語の自律性によって編まれたのだ、という彼の主張には、語る行為の責任放棄のようなものさえ見えて取れる。

過去の克服という問題は、シュリンクの法学研究（過去の責任と現在の法）でも重要であるようだが、評者にとって興味深いのは、彼が小説の形式にどのような可能性を見出し同一テーマを追究しているか、ということである。過去の過ちの法的な責任は、集団や国家ではなく、個人が負うべきものと彼が考えるのならば、過去と向き合う個人の葛藤を描くのに一人称の小説を選んだのも納得がいく。また、学術論文と違い、多様な解釈に開かれた結末を許すフィクションの柔軟性も魅力的だったのではないか。

『朗読者』は、戦後世代が現在埋没する戦争の禍根を認識し、精緻に考察することの重要性を説く。同時に、その行為には実は過去から「自由になりたい」という利己的な欲望が付随する実態も示す。祖国の過ちと個人の罪を裁く難しさ。「読むこと」が裁きに与える影響。戦争責任が個人でなく国家の問題として論じられがちな現代日本の読者に、解放感を保証しないまでも「今」を生き出すことの意義を照らした良書として薦めたい。

Book Review  
法学研究科准教授  
吉野由利



# 乗馬

40代を目前にして、馬に乗りたくなった。夏休みにフランスで、田舎道を馬で散歩することが何度かあったのだが、ガイドさんの後についてトロトロ歩くだけでなく、自分で本格的に馬を乗りこなしたいと思ったのである。日本で、自宅近くの乗馬センターの会員になった。そして一通りは乗れるようになってから、障害飛越に挑戦し、週1回の練習を何年か続けた結果、全日本乗馬連盟の障害飛越1級の資格を得ることができた。1級を持っていると、国体など、全日本レベルの競技会にも参加できる。もちろん国体に出るつもりなど毛頭ないし、仮に出場したところで、地方予選の第1回目ですぐに敗退して「あの人、何しに来たの」とささやかれるのが落ちだろう。しかし、有資格者である私が出場を申請したら、主催者は参加させねばならないのであって、誰もこの私を門前払いにはできないのである(別に、力む必要はないのだが)。

## 絶叫マシンへと近づく1メートル+ $\alpha$ の世界

障害は、高さ1メートルが一つの境になる。1メートル未満だと、馬にとっては「走り幅跳び」である。普通の駆け足の延長でポンと跳んでしまうし、乗り手も1歩の歩幅がちょっと長くなっただけのような感覚で、体が前に進む。しかし1メートルを超えると、高さを感じるのだ。踏み切った瞬間に鞍が上昇してきて、体を上にグッと持ち上げられ、障害を越えると今度はスーッと降下していく。この時に鞍から腰を浮かせて前傾姿勢を保っていると、顔から地面に突っ込んでいくみたいで、ちょっとスリルがある。高さ1メートルを超えると、障害飛越は遊園地の絶叫マシンの世界に1歩近づくのである。

## 乗り手と馬のリズム

障害を跳んで着地する時、馬は前脚の膝を曲げてショックを吸収する(解剖学的には、膝に見えるのは人間だと手首に当たるが)。人間とそれほど太さが違う脚で、自分と乗り手双方、合わせれば500キロ前後の重さを支えなければいけないのだから、馬も大変である。しかし乗り手の方も、あぶみに載せた足先だけで体重を支えて前傾姿勢を保ち続けるのは大変で、跳び終えらるとつい、お尻を鞍につけたくてしまう。だが、このタイミングを間違えると大変である。馬が一度曲げた脚を伸ばす瞬間に鞍に座ってしまうと、ちょうど柔道の巴投げのような力を、人が投げる時の数倍の強さで、くらくらになってしまうのだ。一度、私は同年輩の女性と二人でレッスンを受



けていた。彼女が跳ぶ時、私は障害の横の方角から見ていた。馬が弧を描いて障害を越え、着地した瞬間、彼女が動きを引き継ぐようにフワッと舞い上がり、馬の口を中心として、手綱の長さを半径とする円を空中に描き、馬のかなり前方に着地した。その幾何学的な美しさに、私は素直に感動した。

競技会では、10個前後の障害を決められた順番に跳ぶが、順調に跳んでいったのに最後の一つで失敗することが、私には何度もあった。最初のうちは緊張して気を配っている。全部うまく跳べて、残りは一つだけ。馬もやる気である。手綱を使った歩幅の微調整もうまくいって、踏み切り位置もぴったり合わせられた。後はこれを跳んでゴールするだけ。それ……と思った瞬間、馬が急停止している。油断をして、脚で馬の腹をキュッと締めてやる、最後の扶助を忘れたのである。一気に絶望のどん底に突き落とされる。その後何ヵ月かは悔しくて、最後まで気を抜かないように注意するのだが、喉元過ぎればなんとやら、じきにまた同じ失敗を繰り返すのだ。乗馬には、乗り手の人柄が表れるようである。

## そして国体選手は幻となった

50代も半ばになって、時々馬上で息切れがし、若い人と同じメニューの練習をこなすのをきつく感じるが増えた。同じ頃、準備中の博士論文の執筆も大詰めを迎えて、練習時間が取れなくなった。そろそろ潮時かと思い、乗馬センターを退会した。要するに、幻の国体選手が一人ひそかに姿を消し、「一橋大学博士(社会学)」の保持者が一人誕生したわけである。





株式会社北島  
代表取締役社長

香月道生氏

## 一橋大学といえば 何といてもボート部だ

いつだったか、1932年のロサンゼルスオリンピックにボート選手として出場する青年を描いたNHKドラマ「オリンポスの果実」を漠然と観ていたことを覚えています。原作の小説も読みました。小さい頃からボート競技のテレビ中継もあり、何となく優雅で美しい競技だと思っていた。そんなこともあって、一橋大学に行きたいというより、ボート部に入りたいと思っていたのです。その伏線となったのは、高校2年の春の友人の言葉です。中学校時代から仲のよかった友人が、「一橋大

**あえて全国区を狙わず地元佐賀で愛されることを目指す——  
北島の戦略には頑ななまでのこだわりがある**

# 地球の風



学でボートを漕ぎたい」と言ったのです。「一橋ってボート強いの？」と聞くと、「強い、日本一だ」という返事です。こうして一橋大学に関心を持ちました。また、国立キャンパスの写真を見て、いい環境だなと思いました。もっとも、ボート部は戸田にありましたから、国立キャンパスはあんまり関係ありませんでしたが……。そんなこともあって、「ボートで日本一になれるなら一橋もいいな」と思ってしまったのです。

ところが、母校の佐賀西高校からは例年1～2名しか一橋大学に行っていませんでした。そこで先生に、「なぜ、うちの高校から一橋にあまり行かないのですか？」と聞くと、「英語と数学が難しいから」との答えでした。実は私は、英語に関しては常に上位の成績でしたから、「それなら、自分は一橋大

学に行けるんじゃないか」と簡単に考えてしまったのです。家業が11代続いた老舗でしたから、潜在意識のなかでは家業を継ぐ気持ちはあったかもしれませんが、その時点では将来的に佐賀に帰ってくるとはまったく考えていませんでした。

## 文化を経営に取り入れている 西武百貨店に注目

就職を考え始めたとき、先輩からある都銀に誘われました。銀行に就職するのも悪くないなと思いました。しかし、次第に先輩が大勢いるところよりも、あまりいないところの方が面白いと思うようになってきたのです。よくいえばチャレン

in Saga



# 地域の風



ジ精神、悪くいえばへそ曲がりだったのかもしれませんが。当時は、西武百貨店の堤清二会長が文化を企業経営に取り入れていました。その発想の斬新さが気になっていました。父に相談すると、「食品館（食品売り場）勤務なんかいいんじゃないか」と言っていました。

西武百貨店に入社すると人事部に配属されました。先輩がいない会社に入ったつもりでしたが、人事部には何と3年上の先輩がいたのです。当時の人事部は専門職制度や職種別採用・教育制度など斬新な制度をつくり上げていましたし、若手社員や女性社員の登用、人材活用の宣伝や広報活動など、活発に動いていました。いろいろとすごかれましたが、充実感がありましたね。人事部には情報が集まってきましたし、自分でもさまざまな部門に顔を出してネットワークを広げました。

こうして勤めていたときに、実家では父と祖母が私の行く末を話し合っていたのです。ちょうど仕事に達成感を持ち始めてきた時期でしたから、「じゃあ、帰ろうか」とやすやすと説得されてしまったのです。西武百貨店には5年半勤めて、1988年7月31日付で退社しました。



## 1年間の欧州遊学で 本当の豊かさとは何かを実感

話し合いのなかで父は、「1年間好きなところに行ってい」と言ってくれました。そこで、1988年10月にドイツに行きました。ドイツはヨーロッパの中央に位置しているため、ヨーロッパ各地への旅行がしやすかったからです。

ミュンヘンでは、日本の男子バレーボールチームが金メダルを取った会場のそばに下宿。会場を覗いてオリンピックの感動を新たにしました。また、マーク・スピッツが金メダルを量産したのと同じプールで水泳もしました。このヨーロッパ体験で、ヨーロッパ人のものの考え方を知り、刺激を受けました。ヨーロッパ人は、ものを大切にします。建物を大切にします。町を大切にします。こうしたところは、日本人も見習わなければなりません。経済の成長率は低いかもしれませんが、日本人以上に豊かに暮らしていることに感心しました。例えば、ドイツ人の暮らしぶりはつつまじやかですが、その一方で音楽やオペラ、絵画など芸術に対してはエネルギーです。どんな小さな町にも劇場があります。本当の豊かな暮らしとはこういうものだと思います。

大学時代にはフランス語を選択していましたから、ドイツ語はしゃべれません。そこで、ゲーテ・インスティテュートに通って、午前中はドイツ語を勉強。午後は美術館に行ったり、史跡観光したり……、見て歩き、食べ歩きの毎日でした。1年後には家業に就く前提の旅行でしたから、精力的に見て回りました。イタリアには3回行っていきますし、スペインやポルトガルにも行きました。北島の「丸芳露」のルーツはポルトガルの「bolo（ボーロ）」です。これはポルトガルの船員たちの保存食で、堅いビスケットのようなものだったといわれています。試しにあちこち探したところ、ポルトガルで今でも食べられているボーロを見つけることができました。



「丸芳露」のルーツはポルトガルのボーロ。ポルトガルでもその伝統は受け継がれている。

## まるぼうろ 「丸芳露」の完成の背後にあった 明治10年代のマーケットリサーチ

北島の創業は、元禄9年（1696年）。珠数屋から藩御用商となり、色鍋島の釉薬を扱うなど株仲間をつくって長崎貿易を



行っていました。しかし幕末期に時勢の急変に対応するために製菓業に専念することにしたのです。なお、北島の由来は、当時非公式に名乗っていた名字を屋号としたものと思われま。やがて士分に取り立てられたことから、現在の香月という姓をもらったのです。私は北島の12代目にあたります。菓子屋になってからは5代目です。

南蛮菓子の代表はポーロとカステラです。江戸時代は卵をあまり食用としていなかったことから、ポーロも卵を使わず焼いていました。その堅いビスケット状のものを、明治10年頃に、8代目香月八郎、9代目安次郎が、何とかもっと食べやすく味わい深いものにしようとして改良を重ねたのです。こうして、卵を加えることで現在のようないろんなタイプの「丸芳露」が誕生しました。9代目の幼い兄弟に、それをおやつとして食べさせたところ、おいしいと喜んだのです。そこで近所の人に配って感想を聞いたところ、やはり評判がよかったです。いわばマーケットリサーチですね。そこで自信を得て、本格的に製造販売を始めたのです。

「丸芳露」はあくまで佐賀のお菓子です。ですから、「地元で愛されるものでないと消えていく」「よそで売る必要はない」と社員には言っています。佐賀の人においしいと言ってもらえるのが使命なのです。また、帰郷してきた人が、「丸芳露」を食べて昔を思い出してもらえればうれしく思っています。なぜ、「丸芳露」をつくるか？ その理由は、そこにあるのです。

## 地元で愛されるものでないと消えていってしまう

「丸芳露」を将来にわたって愛してもらい続けるのが、12代目たる私の役目です。売り上げを増やそうとか、事業展開を広げようとか、全然思っていません。あくまで地元で末永く愛されるお菓子づくりが、目標です。実は、それが難しいのです。今の時代、昔からあるお菓子がどんどん消えています。原因は嗜好の変化だけではないと思います。消費者への働きかけを怠った結果なのです。こうして文化が消えていくのが悲しいですね。「丸芳露」を10年後、20年後にも買っていたら。そこに企業努力が必要になります。それには、つねに情報を発信していかないといけないと考えています。

製造にあたって大切なのは、手作業であることです。4～5



「丸芳露」誕生の頃につくられた、「丸芳露」の製造のオリジナルレシピ。

### 「丸芳露」ができるまで

1. 良質な小麦が豊富に穫れる佐賀の豊かな大地に育まれた、丸芳露に最も適した小麦粉を季節によって数種類ブレンドします。鶏卵は新鮮なもののみを使用し砂糖も純度の高いものを厳選しています。それらの材料を配合し丹念に混ぜ合わせます。



2. 「丸芳露」のさっくりとした食感を出すために小麦粉の粘り気が出ないように手早くかき混ぜます。生地を最高の状態にするためあえて機械ではなく熟練の職人の手によって仕上げられます。約2～3時間、冷蔵庫で寝かせて生地を安定させます。



3. 生地を小麦粉の上でこね、一定の状態を保つように職人が手で生地を整えます。平らに伸ばした生地の表面に塗っているのは「ゴマ油」。表面に薄い膜を張ることによっておいしさを守ります。



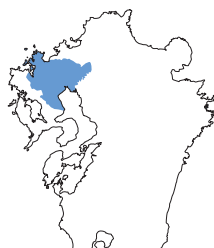
4. 直径5cm程度に丸く型抜きをします。火の通りを均一にするため重量は1gと違いません。



5. 250度で5分間、生地を焼き上げます。短時間で焼き上げるため、ごまかしはききません。一度カマに入るとやり直しがきかない工程です。



6. 一つ一つ大きさと焼き具合などがチェックされ、すばやく包装されます。一品一品全ての商品は厳しい検品を受け「丸芳露」は皆様のお手元へ届けられています。





人が1日2万個つくります。手作業で型抜きをするところに味わいが隠されているからです。人間がやるから仕事に愛着が湧くわけで、機械化することで失われてしまうものがあります。ですから、これまでのやり方を続けることに意味があるのです。実際に、型抜きのし方や焼き方ひとつで、味が違ってきます。社員たちも、社長が何を求めているかを、しっかり受け止め、「丸芳露」にことのほか愛情を注いでくれています。

## 年間300日の合宿生活。 そこで身に付けたもの

私の大学時代は、ボート三昧であまり勉強したとはいえません。正直、いかに単位を取って卒業するか、ということばかり考えていました。それでも一橋で過ごした時間はとても大きなものを私に残してくれたと思っています。

所属は商学部でしたが、ゼミは仏文の海老坂ゼミです。ゼミにもボート部にも語学クラスにも畏友と呼べる人物がいました。また、ボート部には経済、法学など違った学部の学生がいますから、マネタリズムだとか、ケインズだとか、政治

学だとか、民法だとか……彼らの話を何とはなしに聞いていました。すると、おぼろげながらその雰囲気や輪郭がわかってくる。そういえば、そんなこと言っていたなと思い出すこともあって、何となくわかってきます。今でも、その頃の財産が役立っているのです。

当時のボート部では、年間300日は合宿所暮らしでした。週に2回、月曜日とゼミのときしかキャンパスに行かないという、とてもお手本とはいえない学生生活を送っていました。

そこまでボートに情熱を注いでいたのに、私たちが4年生のときは、故障者が続出。私自身も3カ月間ボートを漕げませんでした。東商戦では、本当に艇が走らなかったのです。そんなときに70歳近くのOBが、自分からコーチをかって出してくれました。やらされたのは、スタート練習ばかりです。これがキツイ。息が合わないと艇が出ません。しかし、スタート練習を続けていると、自然に艇が走りだしてきたのです。基本を愚直にやるのが大事だったのです。艇を思い切り走らせるためには、普通の練習をやってもダメだったのですね。その大先輩が偉かったのは、「自分が責任を持ってやる」と言って、誰にも口出しをさせず結果責任を一人で負ったことです。これは、なかなかできることではありません。

当時のボート部長は中川学先生で、現部長の林大樹先生にもコックスとして乗艇指導をしてもらいました。東商戦では、ジュニアでは勝ちましたが、対抗戦では負けてしまいました。ちょうど東大が最強の時期だったのです。ちなみに私は、1982年大学4年のときのインカレで第2位、全日本では第4位でした。

今のボート部を見ると驚くほど恵まれています。練習環境も艇自体も。それで、なぜ勝てないのか？OBとしては、もどかしいですね。自分たちが恵まれていることをもっと感じてほしいと思います。

## 「ユマニテ」という名称に 込められた大きな思い

佐賀では、中心街が非常に厳しい状況におかれています。お客様は、郊外にある大型ショッピングセンターに行ってしまう、後継者のいない個人商店が店を閉めているのです。今こそ地元でがんばろう、地元を骨を埋めるんだという人



左/開店と同時に次々と地元のお客様がお店を訪れる。人気の商品はやはり「丸芳露」である。右/北島では「丸芳露」のほか和菓子、洋菓子などさまざまな菓子を製造販売している。



材が必要になります。

私は今、NPO法人まちづくり機構ユマニテさがの理事長をしています。「ユマニテ (humanité)」は一橋大学と津田塾大学の混声合唱団と同じで、「人間性」を意味するフランス語です。町中から人が消えていく理由は、町中での生活から人間らしさが消えているからではないかと思って付けた名前です。住んでいる人、仕事をしている人、出かけてくる人が心豊かであれば、町は決して衰退しません。今、私たちに欠けているのは地域を大切にしたい人間らしい生活だ、「まち」に人間性を取り戻そう——という発想です。「ユマニテって何？」と聞かれたときには、こう説明してくださいと言っています。

具体的には、テナントリーシングの情報を一元化して、空き店舗を埋めるような活動をしています。出店したい人の相談にも乗っていますし、予算は400万円とまだ少ないですが転入者には補助金制度もあります。こうした地道な活動をベースとし、さらに、月1回の割合でイベントも開催しています。佐賀は昔から商売の町だったことから、町にはいたるところに恵比須像があります(全部で400体を超えます)。このあたりはシュガーロードともいわれる長崎街道に面し、砂糖をはじめとして長崎で手に入れた舶来品を取扱う商売で大いに繁盛していたのです。この恵比須像を町おこしに利用したイベントも開催しています。夏には恵比須像にちなんでエビスビール(サッポロビール株式会社)の協賛を得て、商店街の一角にビアガーデンを開いたのです。

それから本当の意味での「公共」をつくっていきたいですね——これはフランスの考え方に近いといえます。フランス人は自己主張もするが、国も大切にします。「公(パブリック)」に求められていることを知っている国民といえます。そんなところを見習いたいのです。まちづくりは緒についたばかりですが、田舎らしい風景を大事にしながら、みんなが生活しやすい便利な町を目指したいと思います。

## 学生に贈りたい言葉 「Stay hungry, stay foolish」

一橋大学には、右から左までよい先生がたくさんいらっしゃる(笑)。そういうよさを大切にしてほしいと思っています。

学生には、卒業して地元に戻れる人は帰ってほしいと言いたいですね。地方で活躍する人材が一人でも増えるといい。といっても、必ずしも地方に職場があるわけではありませんから、酷な注文かもしれません。しかし、自分のふるさとを大切にしたい気持ちは持ち続けてほしいですね。

自分たちの時代は、将来は明るいものと思っていました。それは地方でも同様でした。ところが、今では日本自体の将来にもクエスチョンが付いています。とりわけ地方は元気がない。それでも、地方に戻ってがんばる気持ちがあるかどうかですね。一橋大学の建学の精神からいえば、そこに自分で新しい道を見出すと言いたいところですが……。

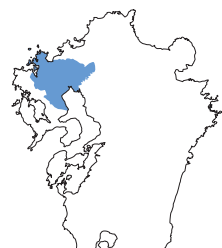
ゼミの先生には、「旅行をしなさい、何でも見てきなさい」とよく言われました。自分の体験でも、「百聞は一見に如かず」です。何事も自分の目で見て判断することが大切だと思っています。10人いたら10人の判断があるはず。マニュアル頼りではなく、自分なりの価値判断が大切なのです。物事を素直に感じられるのは若いときであり、若いときでないとき、こうした考え方はなかなか身に付きません。若さの特権である感受性を発揮しながら、いろいろな経験をしてほしいと思います。日本の若者は豊かで真面目すぎて、才能を生かしきれていないような気がします。そこで最後に、あのスティーブ・ジョブズ氏がスタンフォード大学で行った有名なスピーチの締めくくりの言葉「Stay hungry, stay foolish」を贈ります。



### ◆香月道生(かつき・みちお)

1983年3月一橋大学商学部卒業、1983年4月株式会社西武百貨店入社、1988年7月同社退社、1988年8月株式会社北島入社、2003年8月代表取締役。公職として2007年11月佐賀商工会議所副会頭就任。2009年11月非特定営利活動法人まちづくり機構ユマニテさがが理事長就任。

佐賀の町にはいたるところに恵比須像があり、その数は400体を超える。江戸時代、唯一外国に開かれた港である長崎に近く、多くの商売人が舶来品ビジネスで成功を収めたという。商売繁盛の願いを込めて、恵比須像を建てたのだろうか。



## 一橋大学基金へのご協力、 心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2009年11月末現在で、総額約25億5,000万円（入金済分）に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2009年9月1日から2009年11月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載していません。また、ご寄付者で芳名が一お名前ももれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に関しては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。

なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。



### ご寄付のお申し込みについて

●お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

●一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申し込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

### 如水会会員証カードをお持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では（社）如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回（2月または8月）と年2回（2月および8月）よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

#### 【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL：042-580-8888

FAX：042-580-8889

E-mail：kikin@ad.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

#### 卒業生

206名・8団体（78,407,027円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上	50万円以上 100万円未満	50万円未満
8名・2団体	3名・1団体	195名・5団体
天野文彦 様 笠井栄一 様 小林輝之助 様 高橋治朗 様 三神誠一郎 様 山本千里 様 渡辺 徹 様 明治安田生命如水会 様 柔友会 様 他1名	宅間章二 様 向山秀男 様 湯山 博 様 獅子会（44年会） 有志一同 様	青柳和幸 様 青柳雅夫 様 秋津有作 様 秋場仁人 様 朝稲 寛 様 荒井敏彦 様 井尾 稔 様 池田 格 様 池田三男 様 石川逸記 様 石川昌弘 様 石原 健 様 石原慎太郎 様 石原幹也 様 石原康夫 様 伊勢川暁 様 伊藤陽吉 様 井上暁彦 様 上田一郎 様 植竹勝久 様 上野彰宏 様 上保紀夫 様 大石倉平 様 大串紀之 様 大先一正 様 大竹祐一郎 様 大坪健雄 様 大平 弘 様 岡崎敏治 様 岡山道夫 様 小川恵三 様 沖田俊弥 様 奥野佳史 様 尾坂雅弘 様 小田清五郎 様 小野早苗 様 影山知子 様 笠井良夫 様 加島弘敏 様 勝又敏隆 様 加藤信英 様 金子 収 様 金子昌彦 様



#### 銘板色

【ブロンズ】

個人：30万円以上

法人：100万円以上

【シルバー】

個人：100万円以上

法人：500万円以上

【ゴールド】

個人：1,000万円以上

法人：5,000万円以上

【プラチナ】

個人：3,000万円以上

法人：1億円以上

（金額は累計）



卒業生のご家族

4名 (420,000円)

熊谷潤子 様  
 小林吉春 様  
 鶴田京子 様  
 西岡妙子 様

在学生の保護者・一般の方

13名 (2,543,000円)

浅井隆夫 様  
 大田輝男 様  
 岡崎健一 様  
 金子洋一 様  
 久保田順一 様  
 中島敏治 様  
 松本嘉宏 様  
 三浦 稔 様  
 八木 晃 様  
 他4名

企業・法人等

15団体 (56,095,000円)

アサガミ株式会社 様  
 株式会社イズムクリエーション 様  
 京浜急行電鉄株式会社 様  
 小林製薬株式会社 様  
 近藤商事株式会社 様  
 さわやか信用金庫 様  
 山九株式会社 様  
 城北信用金庫 様  
 社団法人如水会 様  
 白木建設株式会社 様  
 新日鐵化学株式会社 様  
 住友生命保険相互会社 様  
 株式会社7SENSES 様  
 三浦藤沢信用金庫 様  
 三菱樹脂株式会社 様

本学役職員

6名 (730,000円)

狩野保邦 様	鈴木喜参 様	増田 宏 様
上條久嘉 様	関口周太 様	松岡郁夫 様
神谷秀樹 様	多賀信之 様	松下克史 様
亀倉香亮 様	高田 昇 様	松谷好明 様
川崎嘉治 様	高野寛之 様	松吉定男 様
河田仲二 様	高橋祥子 様	丸山喜久雄 様
川原正昭 様	宝田 登 様	三浦裕充 様
菅家 裕 様	田口哲生 様	水谷 章 様
岸田重行 様	武 康雄 様	宮井基雄 様
樹田浩三 様	竹井忠夫 様	武藤嘉孝 様
木田隆平 様	武田文夫 様	村上浩太郎 様
北島隆玄 様	竹村仁美 様	村田英世 様
北野寿之 様	辰巳 順 様	村橋宏太 様
木下宇一郎 様	田中健一 様	望月幸正 様
木全宏之 様	種田公二 様	森 正義 様
木村行成 様	常山忠夫 様	森田岩男 様
工藤正晃 様	坪井照雄 様	安田 悠 様
久保徳孝 様	鶴見明久 様	山木達生 様
熊澤 宏 様	寺田武男 様	山野光俊 様
倉内希良華 様	常盤潤一郎 様	山村 豊 様
倉家良輔 様	鳥居 明 様	山本俊哉 様
蔵野 武 様	中川史郎 様	吉田憲正 様
黒田 讓 様	永澤春人 様	吉田恒彦 様
小菅芳輔 様	中島礼二 様	吉村一孝 様
古茶三千彦 様	中島雄一郎 様	米田晴彦 様
昆野輝親 様	西尾龍太郎 様	脇 祐三 様
齊藤圭史郎 様	西村寿仁 様	渡邊宏之 様
齊藤 恵 様	伯野乙彦 様	野村松美と河田協同会 様
齊藤讓一 様	橋本信哉 様	昭和16年橋友会 様
齊藤 力 様	橋本光彦 様	昭和33年後期一橋寮委員会 様
坂 篁一 様	長谷川和巳 様	(昭和37年卒) 様
酒卷 徹 様	長谷川公彦 様	昭和37年 悠々会 様
坂元昭宏 様	林 信道 様	日本板硝子(株)在勤卒業生有志 様
阪本作郎 様	林 義人 様	他39名
坂本洋三 様	平井秀幸 様	
桜井淳一郎 様	平澤正春 様	
佐藤雄三 様	平本政規 様	
佐野洋二 様	廣田 學 様	
椎名啓至 様	藤代 将 様	
柴崎 健 様	藤原啓税 様	
志水 寛 様	細井和男 様	
塩飽孝二 様	堀内 寛 様	
末長宏二郎 様	本多 孟 様	

Admission Information

MBA Program in International Business Strategy



(1) Total Number of Students To Be Admitted

48 students

(2) Enrollment

October 2010

(3) Time Required to Complete the Program

Two-year Program: October 2010-August 2012

One-Year Program: October 2010-August 2011

(4) Application Deadlines and Admission Notification

Round	Application Deadline	Interview Date	Admission Decision Date
1	January 22, 2010	February 12, 2010	February 26, 2010
2	March 22, 2010	April 9, 2010	April 19, 2010

(\*Please note that the 1st round application is already closed.)

(5) Qualifications of Applicants

The program welcomes both Japanese and non-Japanese applicants with a minimum of three years' full-time work experience at the time of enrollment in October 2010.

For more details about qualifications and application documents to be submitted, please download the Application Package from our web-site: [http://www.ics.hit-u.ac.jp/program/mba\\_download.php](http://www.ics.hit-u.ac.jp/program/mba_download.php)

Inquiries about admissions should be via fax (03-4212-3006) or e-mail ([ics-info@ics.hit-u.ac.jp](mailto:ics-info@ics.hit-u.ac.jp)).

一橋大学広報誌「HQ」

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長（総務、財務、社会連携担当） 山内 進

〈編集長〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授 松井 剛

経済学研究科准教授 笹倉一広

法学研究科准教授 屋敷二郎

社会学研究科教授 阪西紀子

国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾

経済研究所教授 青木玲子

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

光村印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学学長室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel : 042-580-8032 Fax : 042-580-8016

<http://www.hit-u.ac.jp/>

[koho@ad.hit-u.ac.jp](mailto:koho@ad.hit-u.ac.jp)

※ご意見をお寄せください。

一橋大学学長室広報担当 [koho@ad.hit-u.ac.jp](mailto:koho@ad.hit-u.ac.jp)

※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

お詫びと訂正

前号 [HQ秋号 Vol.24] において、一部誤りがありました。

関係者の方々にお詫びいたしますとともに

訂正を以下に明記いたします。

●13ページ

【誤】著作権の放棄が必要だからです。

【正】著作権者の許諾が必要だからです。

【誤】著作権放棄の承諾をもらわなければならないのです。

【正】著作物公開の承諾をもらわなければならないのです。

●広告掲載お問い合わせ先  
一橋大学学長室広報担当  
TEL : 042-580-8032

編集部から

NHKの「坂の上の雲」で秋山真之が東京に出発する松山の浜辺シーンに感動した。自分の夢へ向かって歩みだす若者のエネルギーと彼を精一杯支えて送り出す藩の人々の期待との一体感が伝わってきた。時代が変わっていくことに気付き、次の世代に期待する気持ちが自分もわかるようになった。忘年会で尋ねてみると、学生たちも感動したと聞いてうれしくなった。現代の若者もやはり新しいことに挑戦すること、夢に向かって突っ走ることの魅力を感じているのだ。上の世代は期待を伝えるためには、HALに抱っこされても成田空港に学生を送りに行く熱意が必要なのかもしれない。師範学校の生徒に給料を支払うという政策にも平伏した。次世代への投資どころかその先の世代への投資で、数十年後の日本のシーズを蒔いていた。その後の国の歩みに問題も多かったのはいうまでもないが、良かったこと、悪かったことを見極めて次世代の活躍の舞台づくりをしたいと思います。(RA)





HITOTSUBASHI  
UNIVERSITY

# 一橋大学 《第5回》 関西アカデミア

シンポジウム

## 地球環境保護問題について —気候変動問題とCOP15の成果—

一橋大学は、関西でシンポジウムや講演活動を行う「関西アカデミア」を通じ、今年創立135年を迎える社会科学の総合大学ならではの、諸問題への優れた分析と方策を提唱します。



日時 2010年2月27日(土) 13:30開演(13:00開場)

会場 大阪国際会議場 12階 特別会議室  
〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-51  
TEL:06-4803-5555  
(京阪電車中之島線「中之島(大阪国際会議場)駅」)  
<http://www.gco.co.jp/japanese.html>

ご参加 無料・先着200名 氏名・所属・連絡先を明記の上、2010年2月22日  
①までにE-mailまたはFAXでお申込み下さい。  
【関西アカデミア担当】  
◎E-mail: [academia0227@ad.hit-u.ac.jp](mailto:academia0227@ad.hit-u.ac.jp) ◎FAX:042-580-8016

プログラム ◆基調講演 寺西俊一 一橋大学大学院経済学研究科教授  
◆パネル・ディスカッション  
パネリスト 寺西俊一 一橋大学大学院経済学研究科教授  
植田和弘 京都大学大学院経済学研究科教授  
高村ゆかり 龍谷大学法学部教授  
沖村理史 島根県立大学総合政策学部准教授  
司会 高橋 滋 一橋大学大学院法学研究科教授

主催 一橋大学

協賛 (順不同)  
大阪ガス株式会社 オムロン株式会社  
関西電力株式会社 小林製薬株式会社  
塩野義製薬株式会社 住友生命保険相互会社  
住友電気工業株式会社 株式会社村田製作所

お問い合わせ先

国立大学法人

一橋大学 〒186-8601 東京都国立市中2-1  
◎TEL:042-580-8033

<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2009/0327.html>

※第3回「金融危機に関する公開討論会」(2009年3月7日開催)の様子を大学ホームページでご覧になれます。



Hitotsubashi Quarterly

冬号 January 2010 Vol.25